

総説

日本の旧石器時代人骨

榎崎修一郎¹・馬場悠男²・松浦秀治³・近藤 恵³¹群馬県立自然史博物館学芸課²国立科学博物館人類研究部³お茶の水女子大学生生活科学部

要 旨

これまでに報告されている日本国内20遺跡出土の旧石器時代人骨について、総括を行った。遺跡は、本州・四国・九州に11遺跡が、また沖縄県に9遺跡が分布しており、北海道及び東北地方には分布していない。人骨の残存状態では、全身骨格が発見されている港川及び下地原洞穴以外はどれも一部分しか出土していない。人骨と石器が伴出するとされたものは、鹿野川・聖嶽洞穴・岩戸・山下町第一洞穴の4遺跡であり、人骨と石器が伴出したものは、山下町第一洞穴・ゴヘズ洞穴・ピンザアブの3遺跡である。人骨ではないとの疑いがもたれているのは、葛生及び牛川の2遺跡があげられた。旧石器時代ではないとの疑いがあるものは、日本橋・泊洞穴・明石・夜見ヶ浜・聖嶽洞穴・岩戸・桃原洞穴の7遺跡があげられた。鹿野川遺跡については詳細が不明である。放射年代が報告されているものは、浜北・三ヶ日・山下町第一洞穴・港川・下地原洞穴・ピンザアブの6遺跡しかない。これらの遺跡で発見された人骨は、分類学的にはすべてがホモ・サピエンス (*Homo sapiens*) である。現時点で、旧石器時代人骨を含むと考えられるのは、葛生・浜北・三ヶ日・大山洞穴・山下町第一洞穴・港川・上部港川・カタ原洞穴・ゴヘズ洞穴・下地原洞穴・ピンザアブの11遺跡から出土した人骨である。

キーワード：旧石器時代，更新世，出土人骨，日本

Key Words：Palaeolithic, Pleistocene, Human Skeletal Remains, Japan

はじめに

日本では、1949年に群馬県の岩宿遺跡で旧石器が発見されて以来、旧石器時代が存在したことが確認された。その後、各地で旧石器時代の遺跡が発見されており、現在ではその数は約4,500ヶ所にも達するという(岡村, 1999)。

日本考古学分野では、文化遺物に関する詳しいまとめがある(小野・春成・小田, 1992)。日本の旧石器時代人骨のまとめは、研究報告(水野, 1997; 小片 保, 1981; 佐倉, 1983; SUZUKI, 1975・1982ab)や、リスト(BABA & NARASAKI, 1991; 小片丘彦, 1981; 沖縄県文化振興会・公文書館史料編集室, 1998; ONO・ODA・MATSU'URA, 1999),あるいは年代論を主としたもの(松浦, 1984; MATSU'URA, 1999; 松浦・近藤, 2000)がある。しかし、リストに挙げられていないものや、詳しい紹介が無いもの、

人骨の写真が無いもの等も多い。

海外においては、古人骨に関する詳細な研究書(中国科学院古脊椎動物与古人類研究所, 1987; DAY, 1986; WU & OLSEN, 1985; WU & POIRIER, 1995)やカタログ(GAMBIER & HOUET, 1993; OAKLEY・CAMPBELL・MOLLESON, 1971・1975・1977; ORBAN, 1988・1989・1990・1991; ULLRICH, 1992; WU & WU, 1994)が出版されている。そこで、本論文では、これまでに日本列島から旧石器時代人骨として報告された資料を写真と一緒に網羅的に紹介し、日本出土の旧石器時代人骨カタログとした。

引用文献

- BABA, Hisao & NARASAKI, Shuichiro
 1991 Minatogawa Man, the oldest type of modern *Homo sapiens* in East Asia. *The Quaternary Research*, 30(3): 221-230.
- 中国科学院古脊椎動物与古人類研究所編
 1987 「中国古人類図鑑」, 科学出版社, 176p. 北京.
- DAY, Michael H.
 1986 *Guide to Fossil Man* (4th ed). Cassell Ltd., 432p. London.
- GAMBIER, D. & HOUET, F.
 1993 *Human Remains, An up date : France Upper Palaeolithic*. Université Libre de Bruxelles, 120p. Bruxelles.
- 松浦秀治
 1984 フッ素年代判定法と古人骨の編年。「人類学」(日本人類学会編), pp.46-50, 日経サイエンス社, 東京.
- MATSU'URA, Shuji
 1999 A chronological review of Pleistocene human remains from the Japanese Archipelago. *International Symposium No.11-B*: 181-197, International Research Center for Japanese Studies.
- 松浦秀治・近藤 恵
 2000 日本列島の旧石器時代人骨はどこまでさかのぼるか: 化石骨の年代判定法。「考古学と化学を結ぶ」(馬淵久夫編), 東京大学出版会, 東京。(印刷中)
- 水野 祐
 1997 「通論日本古代史5: 打磧時代篇」, 早稲田大学出版部, 東京, 278p.
- OAKLEY, Kenneth P.・CAMPBELL, Bernard G.・MOLLESON, Theya I.(eds.)
 1971 *Catalogue of Fossil Hominids, Part II: Europe*. British Museum (Natural History), 379p.London.
 1975 *Catalogue of Fossil Hominids, Part III: America, Asia, Australasia*. British Museum (Natural History), 217p. London.
 1977 *Catalogue of Fossil Hominids, Part I: Africa* (2nd ed.). British Museum (Natural History), 223p. London.
- 小片丘彦
 1981 旧石器時代人骨. 季刊・人類学, 12(1):50-58.
- 小片 保
 1981 旧石器時代人骨。「人類学講座5: 日本人II」(小片 保編), pp.7-25, 雄山閣出版, 東京.
- 岡村道雄
 1999 「増補版: 日本旧石器時代史」, 雄山閣, 236p. 東京.
- 沖縄県文化振興会・公文書館史料編集室
 1998 「沖縄県史ビジュアル版2: 考古1」, 沖縄県教育委員会, 56p. 沖縄.
- 小野 昭・春成秀爾・小田静夫
 1992 「図解・日本の人類遺跡」, 東京大学出版会, 242p. 東京.
- ONO, Akira・ODA, Shizuo・MATSU'URA, Shuji
 1999 Palaeolithic cultures and pleistocene hominids in the Japanese Islands: An overview. *The Quaternary Research*, 38(3):177-183.
- ORBAN, R.(ed.)
 1988 *Human Remains, An up date : Italy*. Université Libre de Bruxelles, 60p. Bruxelles.
 1989 *Human Remains, An up date : Canada*. Université Libre de Bruxelles, 41p. Bruxelles.
 1990 *Human Remains, An up date : British Isles and Eastern Germany*. Université Libre de Bruxelles, 69p. Bruxelles.
 1991 *Human Remains, An up date : Spain*. Université Libre de Bruxelles, 92p. Bruxelles.
- 佐倉 朔
 1983 人骨と文化, 「日本の旧石器文化1: 総論編」(麻生 優・加藤晋平・藤本 強編), pp.158-176, 雄山閣出版, 東京.
- SUZUKI, Hisashi
 1975 JAPAN. In: Oakley, K.P.・Campbell, B. G.・Molleson, T. I.(eds.), *Catalogue of Fossil Hominids, Part III*. pp.155-160, The British Museum(Natural History), London.
 1982a Pleistocene man in Japan. *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 90 (Suppl.): 11-26.
 1982b Pleistocene man in Japan. In: *Recent Progress of Natural Science in Japan. Vol.8 Anthropology*, pp.13-17, Science Council of Japan.
- ULLRICH, H.
 1992 *Human Remains, An up date : Armenia, Azerbaijan, Georgia, Russia, Ukraine & Uzbekistan*. Université Libre de Bruxelles, 91p. Bruxelles.
- WU, Rukang & OLSEN, John W.
 1985 *Palaeoanthropology and Palaeolithic Archaeology in the People's Republic of China*. 293p. London.
- WU, Rukang & WU, Xinzhi
 1994 *Human Remains, An up date: China*. Université Libre de Bruxelles, 105p. Bruxelles.
- WU, Xinzhi & POIRIER, Frank E.
 1995 *Human Evolution in China*. Oxford University Press, 317p.Oxford.

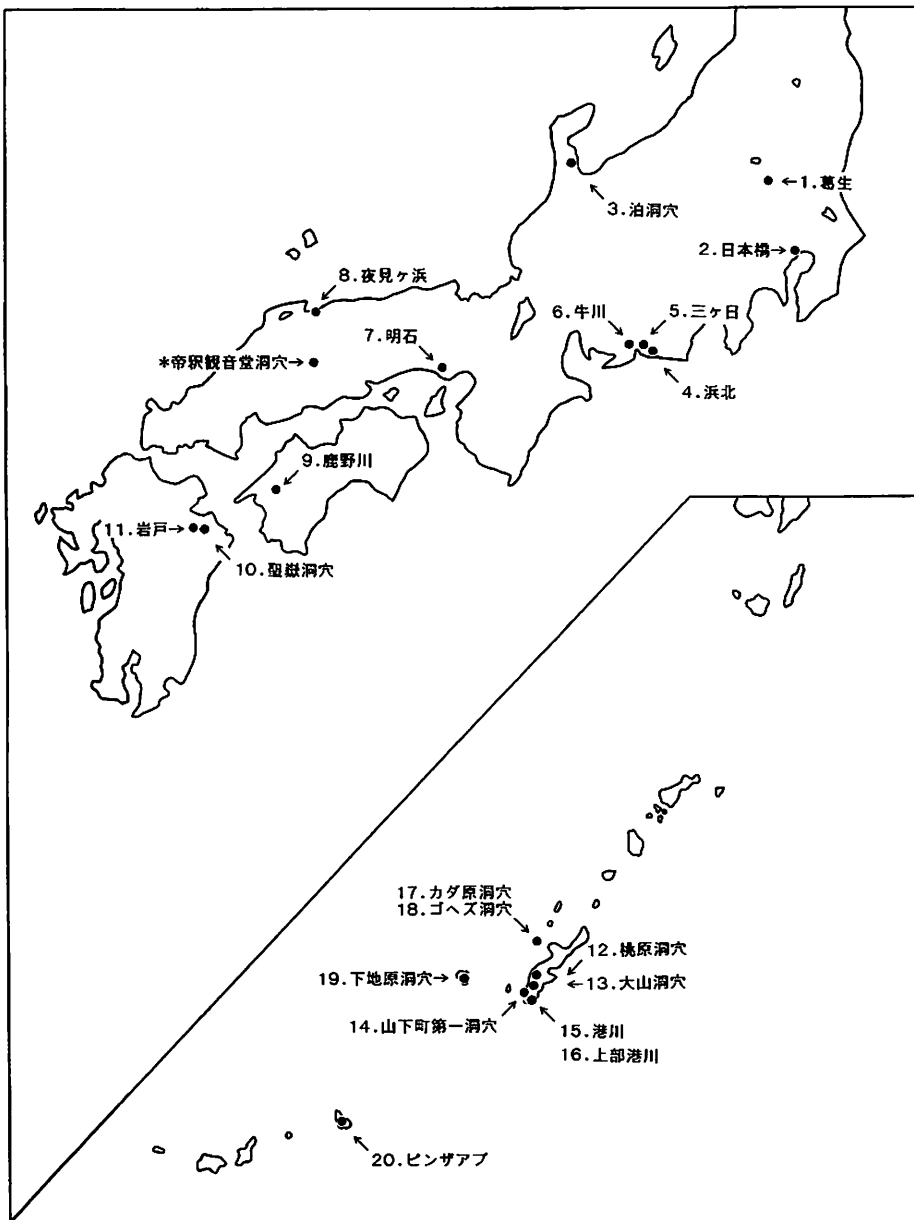


図1：日本の旧石器時代人骨の出土地図

表1：日本の旧石器時代人骨のリスト

日本の旧石器時代人骨リスト					
遺跡名	都道府県名等	出土部位	時代	年代分析*	
1 葛生	栃木県	下顎骨, 四肢骨	後期更新世前期?		
2 日本橋	東京都	頭骨, 四肢骨	後期更新世?		
3 泊洞穴	富山県	頭骨, 肋骨	後期更新世末期? ~完新世前期?	F : 0.883%, 0.916%	
4 浜北	静岡県	上層: 頭骨片, 四肢骨 下部: 脛骨	後期更新世後期	C14 : 約14,000BP (上層) 約18,000BP (下層) UP : 15,600±2,200 (頭頂骨) UT : 18,100 (頭頂骨) F : 0.50% (上層平均) 0.77% (下層) 100F/P ₂ O ₅ : 2.98, 3.09 (上層) 6.13 (下層)	
5 三ヶ日	静岡県	頭骨片, 四肢骨	後期更新世後期 (一部は完新世)	UP : 17,300±1500 (骨盤) & 9,100 (前頭骨) UI : 20,900 (骨盤) & 13,400 (前頭骨) F : 0.64% (平均)	
6 牛川	愛知県	左上腕骨, 左大腿骨	後期更新世	F : 0.89%, 0.96%	
7 明石	兵庫県	左寛骨	完新世?		
8 夜見ヶ浜	鳥取県	左下顎骨	後期更新世?		
9 鹿野川	愛媛県	詳細は不明	?		
10 聖嶽洞穴	大分県	頭骨片, 距骨	後期更新世後期?	F : 0.55%, 0.55% (頭骨) 100F/P ₂ O ₅ : 2.78 (距骨)	
11 岩戸	大分県	右上顎犬歯, 上顎切歯, 乳様突起	後期更新世後期	24,000 B P ?	
12 桃原洞穴	沖縄県本島	頭骨	後期更新世後期?	F : 0.39%	
13 大山洞穴	沖縄県本島	右下顎骨	後期更新世後期	F : 0.85%	
14 山下町第一洞穴	沖縄県本島	右大腿骨, 右脛骨	後期更新世後期	C14 : 32,000±1,000 B P	
15 港川	沖縄県本島	全身骨格	後期更新世後期	C14 : 18,250±650 B P および 16,600±300 B P UP : 19,200±1,800 UT : 19,200 F : 0.87~1.65%	
16 上部港川	沖縄県本島	四肢骨	後期更新世後期	F : 0.78~1.32%	
17 カダ原洞穴	沖縄県伊江島	左頭頂骨	後期更新世後期?	F : 0.42%	
18 ゴヘズ洞穴	沖縄県伊江島	頭骨片, 四肢骨	後期更新世後期?		
19 下地原洞穴	沖縄県久米島	全身骨格 (約8~10ヶ月の乳幼児)	後期更新世後期	C14 : 15,200±100 B P F : 0.21%, 0.48%	
20 ビンザアブ	沖縄県宮古島	頭骨片, 四肢骨	後期更新世後期	C14 : 25,800±900 B P および 26,800±1,300 B P F : 0.655%	
* 帝釈観音堂洞穴	広島県	シカの骨 (大腿骨)	-	-	

註 C14 : 炭素14年代 (年BP), F : フッ素含量, 100F/P₂O₅ : フッ素/リン比 (百分率), UP : ウラン-プロトアクチウム年代 (年前), UT : ウラン-トリウム年代 (年前)

1. ^{クヌ}葛生

遺跡所在地：栃木県安蘇郡葛生町大叶吉沢石灰工業株式会社大叶工場採石場第10丁場第一洞窟（直良，1952a）

栃木県安蘇郡葛生町山菅前河原洞窟（直良，1952b）

人骨部位：重複する出土部位が多いので、混乱を防ぐために便宜的に番号をつけた。

上顎切歯[No.1]，小児右下顎骨[No.2]，左上腕骨骨体中央部[No.3]，右上腕骨下端部[No.4]，左上腕骨下端部[No.5]，右尺骨近位部[No.6]，右第5中手骨[No.7]，左大腿骨[No.8]，左大腿骨下端部[No.9]，右大腿骨骨幹上部[No.10]

系統分類：*Homo? tokunagai*（直良，1952a）

Homo sapiens

発見者：吉沢岳左と金沢武雄〔右上腕骨下端部(No.4)，左上腕骨骨体中央部(No.3)〕(直良1952a)

直良信夫〔上顎切歯(No.1)・左大腿骨下端関節部(No.9)〕(直良，1952a)

秋葉俊彦・長谷川昇・松村 健〔左大腿骨(No.8)〕(直良，1952b)

成瀬俊夫〔右大腿骨骨幹上部(No.10)〕(直良，1952b)

清水辰二郎〔小児右下顎骨(No.2)〕(直良，1952b)

直良信夫〔左上腕骨下端部(No.5)〕(直良，1952b)

東京の高校生〔右第5中手骨(No.7)〕

(SAKURA, 1990)

発見年：1950年6月25日〔右上腕骨下端部(No.4)：第一洞窟〕(直良，1952a)

1950年8月21日〔左上腕骨骨体中央部(No.3)：第一洞窟〕(直良，1952a)

1951年5月3日〔左大腿骨(No.8)：前河原下洞〕(直良，1952b)

1951年5月13日〔右大腿骨骨幹上部(No.10)：前河原洞窟付近〕(直良，1952b)

1951年7月1日〔小児右下顎骨(No.2)：前河原上洞〕(直良，1952b)

1951年7月2日〔上顎切歯(No.1)：第一洞窟〕(直良，1952a)

1951年7月24日〔左上腕骨下端部(No.5)：前河原上洞〕(直良，1952b)

1951年7月25日〔左大腿骨下端関節部(No.9)：第一洞窟〕(直良，1952a)

1984年12月〔右第5中手骨(No.7)〕(Sakura,

1990)

再発見〔右尺骨近位部(No.6)〕(佐倉・馬場，1989)

伴出石器：発見されていない

伴出獣骨：アカネズミ，アズマモグラ，アナグマ，オオカミ，カモシカ，カワネズミ，クマ，タヌキ，ニホンザル，ニホンジカ，ノウサギ，ハタネズミ，ホンシュウヒミズ等（直良，1952b）

年代分析：理化学的年代測定は実施されていない

人骨形態：直良は，右上腕骨下端部[No.4]を17歳未満の男性と，左上腕骨骨体中央部[No.3]を未成年女性と考えている。また，左大腿骨下端部[No.8]を熟年者のもので，これを模式標本として「葛生原人 (*Homo? tokunagai*)」と命名している（直良，1952a）。

国立歴史民俗博物館の春成秀爾によると，右上腕骨下端部[No.4]については，同館の西本豊弘と春成秀爾がクマの幼体・成体と比較したところ，やはりクマの幼体の上腕骨であると，また，小児右下顎骨[No.2]は，大形のサルの可能性が強いという（春成，1985）。以下は，佐倉・馬場（1989）による。

左大腿骨[No.9]，再発見の右尺骨[No.6]と右大腿骨[No.10]，新発見の中手骨[No.7]は人骨と認められる。

しかし，下顎骨[No.2]と上腕骨2点[No.3とNo.4]は，人骨かどうかははっきりしない。埴原（1994）は，この葛生人骨の内，右上腕骨下端部[No.4]を絶滅したギガントピテクスではないかと考えている。

保管場所：葛生町郷土資料館〔小児右下顎骨(No.2)・左大腿骨(No.8)〕

国立科学博物館人類研究部〔右第5中手骨(No.7)〕

国立科学博物館地学研究部〔左上腕骨骨体中央部(No.3)，右上腕骨下端部(No.4)〕

国立歴史民俗博物館考古研究部〔右尺骨近位部(No.6)・左大腿骨下端部(No.9)・右大腿骨骨幹上部(No.10)〕

但し，1951年7月2日発見の上顎切歯(No.1)と1951年7月24日発見の左上腕骨下端部(No.5)の2点は行方不明である。

レプリカ：現在のところ，販売されていない。

コメント：現在，葛生人骨の形態学的研究は馬場悠男が，また，年代学的研究は松浦秀治と近藤 恵がそれぞれ実施中である。

遺跡の堆積状況の解明及び追加標本採集のために，再発掘調査が望まれる。

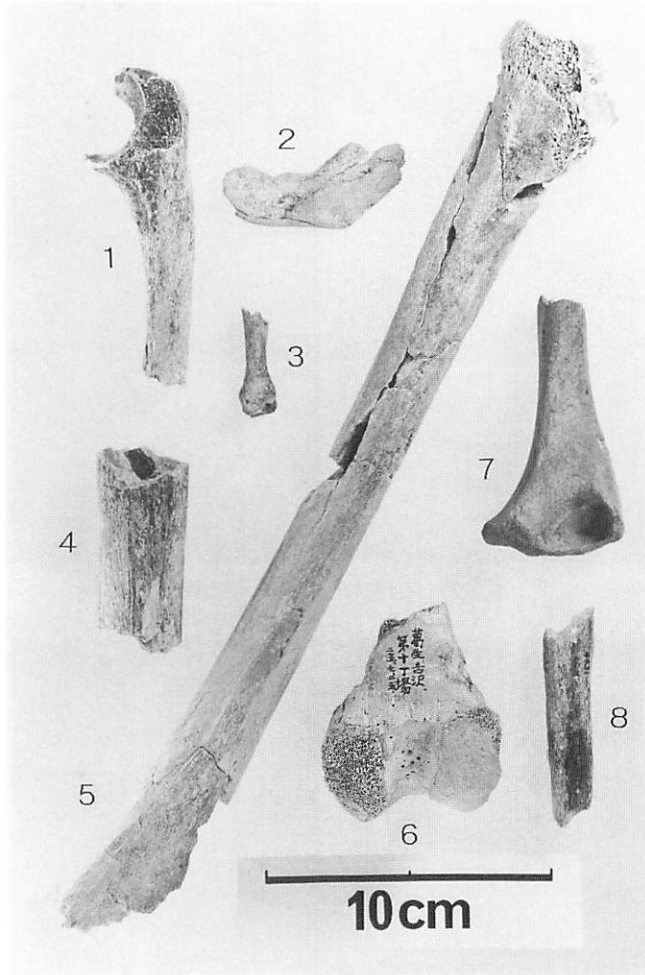


写真1：葛生出土人骨

1. 右尺骨 (No.6), 2. 右下顎骨 (No.2), 3. 右第5中手骨 (No.7), 4. 右大腿骨 (No.10), 5. 左大腿骨 (No.8), 6. 左大腿骨 (No.9), 7. 右上腕骨 (No.4), 8. 左上腕骨 (No.3)

引用文献

植原和郎

1994 「日本人の起源 (増補)」, 朝日新聞社, 261p. 東京.

春成秀爾

1985 解説. 「日本旧石器人の探求」(直良信夫著), 六興出版, pp.331-356. 東京.

直良信夫

1952 a 栃木県葛生発見洪積世人類の遺骸. 人類学雑誌, 62(3): 115-120.

1952 b 葛生前河原洞窟と同所出土の人類化石骨. 考古学雑誌, 38(2):79-100.

SAKURA, Hajime

1990 Human Metacarpal Bone Found at Kuzuu, Northern Kanto, Japan. *Bulletin of the National Science Museum, Tokyo*, Series D, 16:1-8.

佐倉 朔・馬場悠男

1989 39年ぶりの葛生遺跡見学会. 国立科学博物館ニュース, (247):21.

2. 日本橋 (「日比谷」を含む)

遺跡所在地：東京都中央区日本橋室町2-1 三井物産株式会社 [日本橋] (直良, 1951・1959)

東京都日比谷日活国際会館 [日比谷] (直良, 1951)

人骨部位：頭骨, 前肢骨, 椎骨 [日本橋] (直良, 1951)
頭骨, 下顎骨, 第1・2頸椎, 頸椎・胸椎・腰椎の若干, 仙骨上部, 鎖骨, 肋骨破片, 肩胛骨破片, 上腕骨, 尺骨, 撓骨, 手骨 [日本橋] (清野, 1950)

数体分の古人骨 (詳細は不明) [日比谷] (直良, 1951)

系統分類：*Homo sapiens* (清野, 1950)*Homo Nipponbashiensis* [清野謙次が提言] (清野, 1950)*Homo sapiens* var. *Nipponbashiensis* [直良信夫の意向] (清野, 1950)

発見者：鈴木久弥・直良信夫・石嶋 渉 [日本橋] (直良, 1951)

建設工事現場で発見 [日比谷] (直良, 1951)

発見年：1951年3月9日 [日本橋] (直良, 1951; 清野, 1950)

1951年3月25日・4月7日 [日比谷] (直良, 1951)

伴出石器：発見されていない (直良, 1951・1959)

伴出獣骨：発見されていない (直良, 1951・1959)

近くから巨大な獣骨が発見 [日本橋] (清野, 1950)

年代分析：下部有楽町貝層 (直良, 1951・1959).

1万年前から8千年前 (高橋, 1984)

理化学的年代測定は実施されていない。

人骨形態：以下は, 直良 (1951) による。

性別は女性で, 死亡年齢は20歳から24・25歳。

保管場所：不明

レプリカ：現在のところ, 販売されていない。

コメント：鈴木 (1956) は, この人骨を中世又は近世初頭のものと考えている。また, 植原 (1995) は, この人骨は江戸時代のものであると記している。現在, この人骨はその所在が行方不明である。一説によれば, 名古屋の南山大学にあると言われている (直良, 1981; 高橋, 1984)。遺跡の再調査は, 現状では望めないが, 人骨の所在を明らかにした上で, 形態学的及び年代学的再研究が望まれる。

引用文献

埴原和郎

1995 「日本人の成り立ち」, 人文書院, 310p. 東京.

清野謙次

1950 「人類の起源」, 弘文堂, 245p. 東京.

直良信夫

1951 日本橋人類について. 武蔵野手帖, 2.

1959 「人類発達史」, 校倉書房, 244p. 東京.

1981 「学問への情熱」, 佼成出版社, 269p. 東京.

鈴木 尚

1956 縄文時代人骨. 「日本考古学講座3:縄文文化」, pp.353-375, 河出書房, 東京.

高橋 徹

1984 「明石原人の発見:聞き書き直良信夫伝」, 社会思想社, 257p. 東京.

トマリ
3. 泊洞穴

遺跡所在地: 富山県氷見市泊洞穴 (小片・加藤・六反田, 1989)

遺跡の特徴: 標高約5mにある洞穴が, 国道160号線によりほぼ直角に削り取られ, 穴幅6.2m, 穴高1.5m, 奥行き2.5mの規模で取り残された (小片・加藤・六反田, 1989)

人骨部位: 頭骨と肋骨 (小片・加藤・六反田, 1989)

系統分類: *Homo sapiens* (小片・加藤・六反田, 1989)

発見者: 湊 晨と林 夫門 [頭骨] (小片・加藤・六反田, 1989)

小片 保 [肋骨] (小片・加藤・六反田, 1989)

発見年: 1967年10月23日 [頭骨] (小片・加藤・六反田, 1989)

1972年 [肋骨] (小片・加藤・六反田, 1989)

伴出石器: 発見されていない

伴出獣骨: 人骨発見層より上層より発見 (小片・加藤・六反田, 1989) とあるが, 詳細は不明.

年代分析: 更新世末期あるいは完新世前期 (松浦, 1985) フッ素分析値は, 0.883% [頭骨], 0.916% [肋骨] (松浦, 1985)

人骨形態: 以下は, 小片・加藤・六反田 (1989) による. 20歳代前半の男性と推定される. 頭骨は全体的に, 縄文時代人に似ており, 特に, 上顔面部は早期及び前期縄文時代人に似る. しかし, 形態からは, 更新世末期まで遡れるか否かは現時点では結論づけられない.

保管場所: 新潟大学医学部解剖学教室

レプリカ: 現在のところ, 販売されていない.

コメント: 理化学的年代分析が継続中であるが, 完新世に属する可能性が高いと思われる (松浦・近藤, 2000).

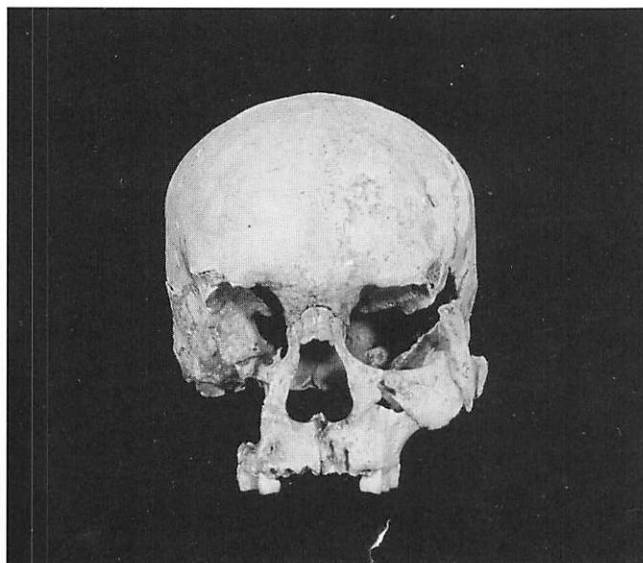


写真2: 泊洞穴出土人骨 (前面観)

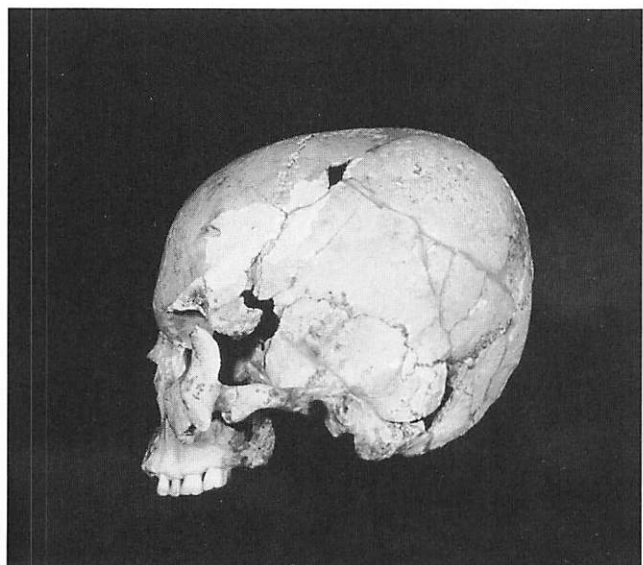


写真3: 泊洞穴出土人骨 (左側面観)

引用文献

松浦秀治

1985 富山県氷見市泊洞穴から出土した人骨のフッ素含量. 国立科学博物館専報, 18:219-223.

松浦秀治・近藤 恵

2000 日本列島の旧石器時代人骨はどこまでさかのぼるか: 化石骨の年代判定法. 「考古学と化学を結ぶ」(馬淵久夫編), 東京大学出版会, 東京. (印刷中)

小片 保・加藤克知・六反田篤

1989 富山県氷見市泊洞穴から出土した人骨の形質について. 人類学雑誌, 97(3):353-372.

ハマキタ
4. 浜北

遺跡所在地：静岡県浜北市根堅岩水寺まる本岩水石灰工業採石場（鈴木・遠藤，1966）

人骨部位：上層：前頭骨，頭頂骨，後頭骨，右頬骨，右下第3大臼歯，右鎖骨，右上腕骨骨幹部，右尺骨，右腸骨（鈴木，1966）
下層：右脛骨（鈴木，1966）

系統分類：*Homo sapiens*（鈴木，1966）

発見者：長谷川善和〔頭骨，腸骨〕（鈴木・遠藤，1966）
鈴木 尚・高井冬二〔上腕骨，鎖骨〕（鈴木・遠藤，1966）
鈴木あきの〔下顎大臼歯〕（鈴木・遠藤，1966）
鈴木 尚・高井冬二〔脛骨，尺骨〕（鈴木・遠藤，1966）

発見年：1960年5月6日〔頭骨，腸骨〕（鈴木・遠藤，1966）
1961年5月5日〔上腕骨，鎖骨〕（鈴木・遠藤，1966）
1961年9月頃〔下顎大臼歯〕（鈴木・遠藤，1966）
1962年5月15日〔脛骨，尺骨〕（鈴木・遠藤，1966）

伴出石器：発見されていない

伴出獣骨：ヒョウ，シカ，ニホンザル，クズウアナグマ等（高井・長谷川，1966）

年代分析：ウラン-プロトアクチニウム法で，15,600年±2,200年前〔頭頂骨〕（横山，1992）
ウラン-トリウム法で，18,100年前〔頭頂骨〕（鈴木，1998：横山祐之による）

C-14法で，上層は約14,000年BP，下層は約18,000年BP（松浦・近藤，2000）

フッ素分析値は，上層人：0.41%〔前頭骨〕・0.39%〔頭頂骨〕・0.55%〔鎖骨〕・0.64%〔上腕骨〕・0.50%〔腸骨〕，下層人：0.77%〔脛骨〕（田辺，1966）

骨のフッ素／リン比〔100×F(%) / P₂O₅(%)〕は，上層人で2.98と3.09，下層人で6.13（松浦・近藤，2000）

人骨形態：以下は，鈴木（1966）による。

上層（上層人骨は，同一個体で20歳代の女性。身長は，143.1cmと推定）

前頭骨・頭頂骨・後頭骨・右頬骨・右鎖骨
右下第3大臼歯：退化型を示す

右上腕骨：上下両端を欠く。推定身長は，約143cm。下端には肉食動物による噛み跡がある。

右尺骨：上端には肉食動物による噛み跡がある。

右腸骨：三ヶ日より小さく，若い女性に属す。

下層（下層人骨の性別及び死亡年齢は不明だ

が，女性と推定される）

右脛骨：脛骨のほぼ中央。長さ73mm。

保管場所：東京大学総合研究博物館人類先史部門

レプリカ：現在のところ，販売されていない。

コメント：1962年7月23日～8月3日及び1963年7月3日～7月12日にかけて，東京大学理学部人類学教室及び地学教室との合同で発掘調査が行われているが，その際には人骨は発見されていない。

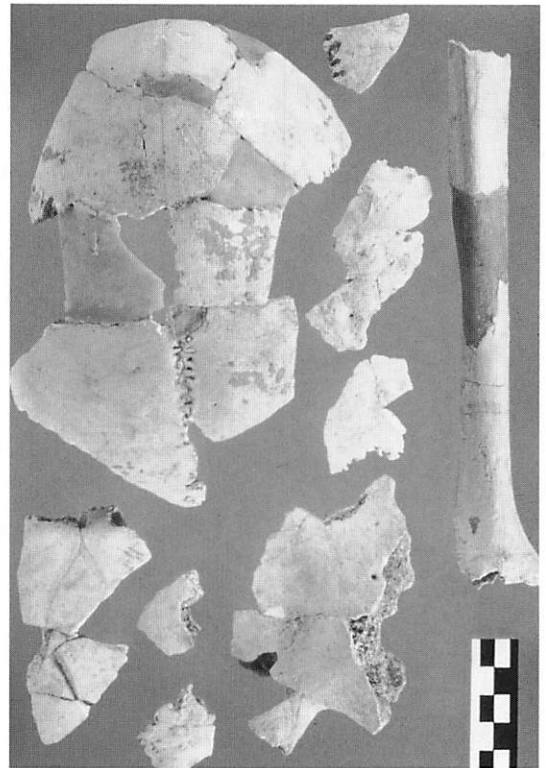


写真4：浜北出土人骨

引用及び参考文献

鎮西清高

1966 浜北市岩水寺根堅洞くつの堆積物とその地質時代，人類学雑誌，74(3/4):137-152.

長谷川善和

1966 人骨の含まれていた層準について，人類学雑誌，74(3/4):153-154.

松浦秀治・近藤 恵

2000 日本列島の旧石器時代人骨はどこまでさかのぼるか：化石骨の年代判定法。「考古学と化学を結ぶ」（馬淵久夫編），東京大学出版会，東京。（印刷中）

鈴木 尚

1966 浜北人骨の形質。人類学雑誌，74(3/4):119-136.

1998 「骨が語る日本史」，学生社，242p. 東京.

鈴木 尚・遠藤万里

1966 浜北根堅遺跡とその調査経過。人類学雑誌，74(3/4):101-118.

高井冬二・長谷川善和

1966 岩水寺層の脊椎動物化石。人類学雑誌，74(3/4):155-167.

田辺義一

1966 浜北市根堅遺跡出土人骨の弗素含有量. 人類学雑誌, 74 (3/4):168-171.

横山祐之

1992 現代人の起源を探る. 科学, 62:195-196.

ミツカビ 5. 三ヶ日

遺跡所在地：静岡県引佐郡三ヶ日町只木の石灰岩採石場 (鈴木, 1962)

人骨部位：前頭骨[No.1], 前頭骨[No.2], 右頭頂骨[No.3], 左頭頂骨[No.4], 右側頭骨[No.5], 右腸骨[No.6], 右大腿骨[No.7] (鈴木, 1962)

系統分類：*Homo sapiens* (鈴木, 1962)

発見者：高橋祐吉 [右腸骨：No.6] (鈴木, 1962)

1959年10月22日から31日まで, 東京大学理学部人類学教室及び地質学教室による発掘調査団 [前頭骨：No.1&2・頭頂骨：No.3&4・右側頭骨：No.5] (鈴木, 1962)

鈴木 尚・高井冬二 [右大腿骨：No.7] (鈴木, 1962)

発見年：1959年9月15日[右腸骨：No.6] (鈴木, 1962)

1959年10月25日[右側頭骨：No.5] (鈴木, 1962)

1959年10月27日から29日[前頭骨：No.1&2, 頭頂骨：No.3&4] (鈴木, 1962)

1961年5月5日[右大腿骨：No.7] (鈴木, 1962)

伴出石器等：発見されていないが, 人骨器と思われるものが出土 [人骨形態参照]

伴出獣骨：アヅマモグラ, ホンシュウヒミズ, ジネズミ, ユビナガコウモリ, ハタネズミ, ノウサギ, オオカミ, タヌキ, ヒョウ, オオツノジカ, ニホンジカ, イノシシ, アオモリゾウ (ナウマンゾウ), ヤマドリ, ヤマカガシ, シマヘビ, ヒキガエル (高井, 1962)

年代分析：ウラン-プロトアクチニウム法で, 9,100年前 [前頭骨]・17,300±1,500年前 [骨盤] (横山, 1992; 鈴木, 1996・1998)

ウラン-トリウム法で, 13,400年前 [前頭骨]・20,900年前 [骨盤] (鈴木, 1996・1998; 横山祐之による)

フッ素分析値は, 0.57%[No.1：前頭骨], 0.64%[No.2：前頭骨], 0.78%[No.3：右頭頂骨], 0.55%[No.4：左頭頂骨], 0.66%[No.5：右側頭骨], 0.70%[No.6：右腸骨], 0.55%[No.7：右大腿骨] (田辺, 1962)

人骨形態：以下は, 鈴木 (1962) による.

No.1 [前頭骨]: 鱗部左後半を占める骨片. 成人男性.

No.2 [前頭骨]: 右眼窩上部の骨片. 成人女性.

No.3 [右頭頂骨]: 乳様角を含む頭頂骨後下隅を占める骨片. 成人男性. 外面に人為的の加工部がある.

No.4 [左頭頂骨]: 内側後端を占める骨片. 成人男性. 周縁の一部には, 人為的と思われる加工部 (切削) がある.

No.5 [右側頭骨]: No.3の右頭頂骨と接合するので, 同一個体に属する. 成人男性.

No.6 [右腸骨]: 右腸骨前半部. 成人男性.

No.7 [右大腿骨]: 右大腿骨骨幹部で, 全長237mm. 復元した全長は, 約390mmとなり, 身長は154.6cmとなる. 成人男性.

上記の7片の人骨は, 成人男性[No.1, No.3-6], 成人女性[No.2], 成人男性[No.7]の3体とみなされる.

保管場所：東京大学総合研究博物館人類先史部門

レプリカ：現在のところ, 販売されていない.

コメント：三ヶ日資料のうち, 一部は縄文時代早期の混入と考えられる (松浦・近藤, 2000)

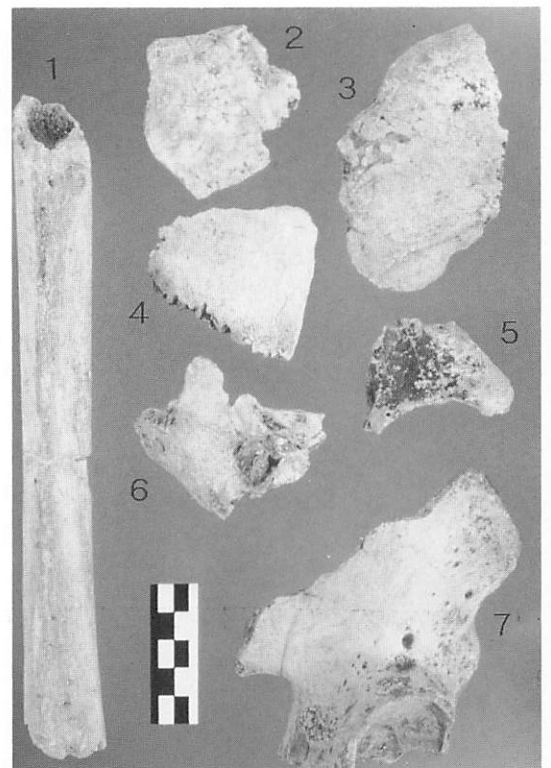


写真5：三ヶ日出土人骨

- { 1. 右大腿骨 (No.7), 2. 右頭頂骨 (No.3),
3. 前頭骨 (No.1), 4. 左頭頂骨 (No.4),
5. 前頭骨 (No.2), 6. 右側頭骨 (No.5),
7. 右腸骨 (No.6), }

引用及び参考文献

鎮西清高

1962 三ヶ日町周辺の第四系と只木層, 人類学雑誌, 70(1):33-35.

長谷川善和

1962 只木層について, 人類学雑誌, 70(1):29-32.

松浦秀治・近藤 恵

2000 日本列島の旧石器時代人骨はどこまでさかのぼるか: 化石骨の年代判定法. 「考古学と化学を結ぶ」(馬淵久夫編), 東京大学出版会, 東京.(印刷中)

鈴木 尚

1962 三ヶ日人骨. 人類学雑誌, 70(1):1-20.

1996 「骨」, 学生社, 237p. 東京.

1998 「骨が語る日本史」, 学生社, 242p. 東京.

高井冬二

1962 只木層の脊椎動物化石. 人類学雑誌, 70(1):36-40.

田辺義一

1962 三ヶ日遺跡出土人骨の弗素含有量. 人類学雑誌, 70(1):41-45.

渡辺 仁・遠藤萬里・尾本恵一

1962 三ヶ日只木遺跡と遺物埋没状況. 人類学雑誌, 70(1):21-28.

横山祐之

1992 現代人の起源を探る. 科学, 62:195-196.

ウシカワ
6. 牛川

遺跡所在地: 愛知県豊橋市牛川町忠興牛川鉦山(鈴木, 1959・1963・1980)

人骨部位: 左上腕骨の骨幹中央部, 左大腿骨頭(鈴木, 1959・1963・1980)

系統分類: *Homo sapiens*?

発見者: 石川一美[左上腕骨], 紅村 宏[左大腿骨頭](鈴木, 1959・1963・1980). 田中 伝[左上腕骨](水野, 1983)

発見年: 1957年5月[左上腕骨], 1959年2月[左大腿骨頭](鈴木, 1959・1963・1980)

伴出石器: 発見されていない

伴出獣骨: ニホンザル, テン, オコジョ, イタチ, クズウアナグマ, タヌキ, ニホンムカシジカ, ハタネズミ, トガリネズミ, ホンシュウヒミズ(鈴木, 1963)

年代分析: フッ素分析値は, 0.89% [上腕骨], 0.96% [大腿骨](田辺, 1962)

人骨形態: 以下は, 鈴木(1959・1963・1980)及びSUZUKI & TAKAI (1959)による.

上腕骨は, 長さ約10cmの左上腕骨骨幹中央部. 恐らく女性. 復元した上腕骨の最大長は, 約230mm. この最大長から身長を推定すると, 134.8cm.

大腿骨は, 左大腿骨頭の上半で, 男性の可能

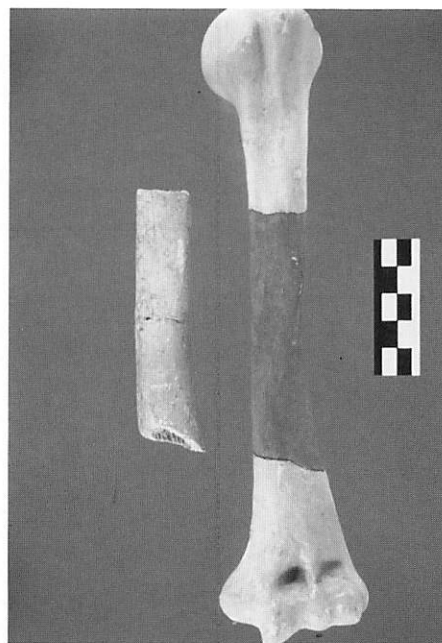


写真6: 牛川出土人骨

性がある. 復元した大腿骨の最大長の平均は366.5mm. この最大長から身長を推定すると, 149.2cm.

保管場所: 東京大学総合研究博物館人類先史部門

レプリカ: 現在のところ, 販売されていない.

コメント: 上腕骨に関しては, 人骨ではないという意見が出されている(埴原, 1995; 松村・溝口, 1996; 岡村・松藤・木村・辻・馬場, 1998). 特に, 国立科学博物館の馬場悠男は, この骨をナウマンゾウの子供の腓骨と考えている(岡村・松藤・木村・辻・馬場, 1998). しかし, ヒトではないと否定する論文は未だに発表されておらず, まだ, ヒトか否かの論争には決着はついていない. 将来, 形態学的再研究が望まれる. 時代については, SUZUKI & TAKAI (1959)では中期更新世の後期に対比されたが, 現状では後期更新世に比定される(松浦・近藤, 2000). 今後, 絶対年代の測定が望まれる.

引用文献

埴原和郎

1995 「日本人の成り立ち」, 人文書院, 310p. 東京.

松村博文・溝口優司

1996 日本での人類進化. 「ビテカントロプス展」(馬場悠男監修), pp.73-79, 国立科学博物館, 東京.

水野一道

1983 牛川・三ヶ日・浜北人の遺跡. 「日本の遺跡発掘物語1: 旧石器時代」(森 浩一監修), pp.143-168, 社会思想社, 東京.

岡村道雄・松藤和人・木村英明・辻誠一郎・馬場悠男

1998 「シンボジウム日本の考古学1: 旧石器時代の考古学」,

学生社, 354p. 東京.

鈴木 尚

1959 牛川鉱山で発見された洪積世人類の上腕骨. 科学, 29:398-402.

1963 「日本人の骨」, 岩波書店, 223p. 東京.

1980 牛川人上腕骨の形態学的研究. 「成城大学経済学部創立三十周年記念論文集」, pp.746-734(121-133), 成城大学, 東京.

SUZUKI, Hisashi & TAKAI, Fuyuji

1959 Entdeckung eines pleistozanen hominiden Humerus in Zentral-Japan. *Anthropologischer Anzeiger*, 23:224-235.

田辺義一

1962 三ヶ日遺跡出土人骨の弗素含有量. 人類学雑誌, 70(1):41-45.

7. 明石^{アカシ}

遺跡所在地：兵庫県明石市大久保町西八木（春成，1994）

人骨部位：左寛骨（直良，1981）

系統分類：*Nipponanthropus akashiensis* [通称]（長谷部，1948）

Homo sapiens (ENDO & BABA, 1982)

発見者：直良信夫

発見年：1931年4月18日（長谷部，1948）

伴出石器：発見されていない。但し、1985年の再調査の際に木器とも考えられる板が発見されている（春成，1987）

伴出獣骨：発見されていない

年代分析：実施されていない

人骨形態：オリジナルの人骨は、1945年5月25日の東京大空襲の際に焼失した（直良，1981，高橋，1984）。しかし、東京大学人類学教室に残されていた石膏模型と写真で研究が行われ、人骨を研究した長谷部言人は、その原始性に着目した。

その後、遠藤萬里と馬場悠男は、形態的研究 (ENDO & BABA, 1982) と非計測的形質の研究 (ENDO & BABA, 1985・1986) により、明石人は、更新世人骨ではなく、完新世人骨であると結論づけた。

その後、人骨の形態や化石化の程度を巡って、その古さを否定する遠藤萬里と馬場悠男（馬場，1984；遠藤，1984；遠藤・馬場，1984）と肯定する直良博人（直良信夫の長男）と吉岡郁夫（直良，1983；吉岡，1978ab・1983・1984）との間で論争が行われた。

保管場所：オリジナルは、1945年5月25日に東京大空襲で焼失。石膏模型は、東京大学総合研究博物館人類先史部門に所蔵。鹿間時夫が所有してい

た写真は、国立科学博物館人類研究部に所蔵。

レプリカ：現在のところ、販売されていない。

コメント：発見の経緯及び論争については、詳細な報告がすでに出版されているのでそちらを参照されたい（春成，1984・1987・1994；直良三樹子，1995；直良信夫，1981；高橋，1984）。本遺跡は、これまでに2回調査が行われている。1回目は、1948年10月～11月にかけて「明石西郊含化石層研究特別委員会」〔委員長・当時東京大学理学部人類学教室の長谷部言人〕による調査が行われたが、人骨や遺物は発見されなかった（高井・棚井，1949；渡邊，1949；渡辺，1950）。

2回目は、1985年3月1日～21日にかけて「明石人発掘調査団」〔団長・国立歴史民俗博物館の春成秀爾〕による調査が行われ、人骨や石器は発見されなかったものの、木器とも考えられる板が発見されている（春成，1987）。東北大学医学部の百々幸雄は、遠藤萬里と馬場悠男の研究結果と同様にこの人骨が完新世人骨であることを認めた上で、性別に関しては男性であると考えている（百々，1987）。京都大学霊長類研究所の片山一道は、この人骨をクラインフェルター症候群などの両性具有ではないかと疑っている（片山，1990）。また、以前、明石人骨の再研究を行い、完新世人骨であると結論づけた馬場は、最近、数万年前でもありうると発言している（岡村・松藤・木村・辻・馬場，1998）。



写真7：明石出土人骨

引用及び参考文献

馬場悠男

1984 吉岡氏の批判2に対する回答：明石寛骨の形態と復元。人類学雑誌, 92(3):231-238.

百々幸雄

1987 明石人=現代人説の検討。国立歴史民俗博物館研究報告(春成秀爾編), 13:249-262.

遠藤萬里

1984 吉岡の「批判2」に対する反論：明石寛骨に関して。人類学雑誌, 29(3):239-241.

ENDO, Banri & BABA, Hisao

1982 Morphological investigation of innominate bones from Pleistocene in Japan with special reference to the Akashi man. *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 90(Suppl.):27-54.

1985 Examination of nonmetric characters of the form of innominate bones from Pleistocene in Japan. Part I: Description. *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 93(4):461-486.

1986 Examination of nonmetric characters of the form of innominate bones from Pleistocene in Japan. Part II: Nonparametric statistical analysis. *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 94(1):39-49.

遠藤萬里・馬場悠男

1984 直良氏および吉岡氏の批判への回答。人類学雑誌, 92(1):53-58.

春成秀爾

1984 明石人問題。旧石器考古学, (29):1-30.

1987 明石市西八木海岸の発掘調査。国立歴史民俗博物館研究報告, 13, 304p.

1994 「明石原人とは何であったか」, 日本放送出版協会, 317p. 東京.

長谷部言人

1948 明石市附近西八木最新世前期堆積出土人類腰骨(石脊型)の原始性に就いて。人類学雑誌, 60(1):32-36.

1981 「日本人の祖先」, 築地書館, 209p. 東京.

片山一道

1990 「古人骨は語る」, 同朋舎, 210p. 東京.

直良三樹子

1995 「見果てぬ夢「明石原人」」, 時事通信社, 278p. 東京.

直良信夫

1981 「学問への情熱」, 佼成出版社, 269p. 東京.

直良博人

1983 明石原人の再検討：遠藤及び馬場による<明石人現代人説>についての再検討。人類学雑誌, 91(4):169-184.

岡村道雄・松藤和人・木村英明・辻誠一郎・馬場悠男

1998 「シンポジウム日本の考古学1：旧石器時代の考古学」, 学生社, 354p. 東京.

佐倉 朔

1985a 西八木寛骨の写真と素描(故鹿間時夫教授の資料)。人類学雑誌, 93(1):113-116.

1985b 訂正。人類学雑誌, 93(2):285-286.

高橋 徹

1984 「明石原人の発見」, 社会思想社, 257p. 東京.

高井冬二・棚井敏雄

1949 所謂「ニッポナントロプス」の産出地層に就て。人類学雑誌, 60(3):117-120

渡邊 仁

1949 ニッポナントロプス層の自然破砕礫。人類学雑誌, 60(3):121-122.

渡辺直経

1950 明石西郊含化石層に於ける骨の保存可能性。人類学雑誌, 61(4):183-190.

1970 人類学からみた前期洪積世：特に明石原人を含めて。第四紀研究, 9(3/4):176-183.

吉岡都夫

1978a 明石市西八木出土人骨(寛骨)についての再検討。びぞん通信, (51):857-864.

1978b 明石原人に関する補遺。びぞん通信, (53):926-927.

1983 明石人寛骨の形態：遠藤・馬場論文批判。人類学雑誌, 91(4):497-500.

1984 ふたたび明石人寛骨の形態について：遠藤・馬場論文批判2。人類学雑誌, 92(3):225-229.

ヨミガハマ 8. 夜見ヶ浜

遺跡所在地：鳥取県境港市外江町，新日本合板株式会社敷地(直良, 1972)

人骨部位：左側下顎骨(直良, 1972)

系統分類：*Homo sapiens fossilis*(直良, 1972)

発見者：錦織文英(直良, 1972)

発見年：1969年12月5日(直良, 1972)

1968年12月5日(NAORA, 1972)

地層：地表下，約6mの地点の海成小砂層(直良, 1972)

伴出石器：発見されていない

伴出獣骨：巨獣の肋骨片が1個出土したが，この獣骨の種名は不明(直良, 1972)

年代分析：おそらく上部洪積世[註：後期更新世](直良, 1972)。

ただし，理化学的年代測定は実施されていない。

人骨形態：以下は，直良(1972)及びNAORA(1972)による。

第1大臼歯及び第2大臼歯は，残存している。

第3大臼歯の歯冠部は破損している。性別は

女性で，死亡年齢は約50歳。

保管場所：早稲田大学理工学部？

レプリカ：現在のところ，販売されていない。

コメント：夜見ヶ浜人骨の形態学的再研究は，東京大学名誉教授及び国際日本文化研究センター名誉教授の埴原和郎と国立科学博物館動物研究部の山田 格で行われていたが，その成果が未発表である。今後，絶対年代の測定が望まれる。

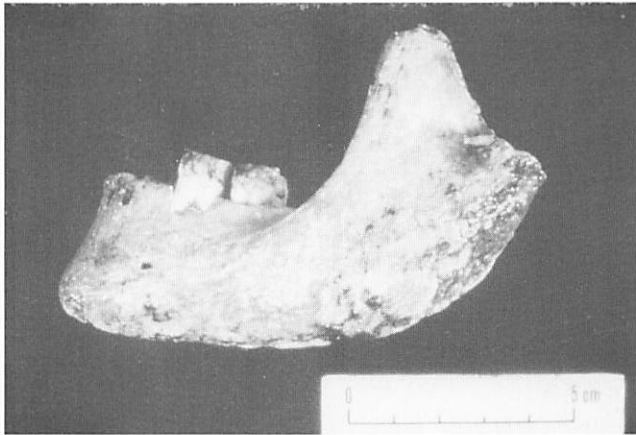


写真8：夜見ヶ浜出土人骨

引用文献

直良信夫

1972 鳥取県境港市発見の人骨. 「古代遺跡発掘の脊椎動物遺体」, pp.161-166, 校倉書房, 東京.

NAORA, Nobuo

1972 Evidence of Upper Pleistocene hominid from Western Japan. 「古代遺跡発掘の脊椎動物遺体」, pp.193-197, 校倉書房, 東京.

9. 鹿野川

遺跡所在地：愛媛県喜多郡肘川町鹿野川山鳥坂423 (樋口, 1978)

人骨部位：骨片 (樋口, 1978)

系統分類：不明

発見者：不明

発見年：不明

伴出石器：加工石片 [不明] (樋口, 1978)

伴出獣骨：オオツノジカ, チンパンジー (樋口, 1978)

年代分析：実施されていない

人骨形態：不明

保管場所：國學院大學考古学資料館 (樋口, 1978)

レプリカ：現在のところ, 販売されていない.

コメント：この人骨に関しては, 情報が非常に少なく, しかも詳細な形態学的記載がなされていない. 判出獣骨に, チンパンジーとあるが, これがもし本当にチンパンジーであるとしたら, 日本最初の発見となる. 人骨・石器・獣骨の詳細な記載が望まれる.

引用文献

樋口清之

1978 日本人はどこから来たか. 「日本史の謎と発見1: 日本人の先祖」, pp.15-52, 毎日新聞社, 東京.

10. 聖嶽洞穴

遺跡所在地：大分県南海部郡本匠村大字宇津々聖嶽洞穴 [賀川 (1967) や小片 保 (1967) では「聖岳 (ひじりだけ)」と記載しているが, 現地では「聖嶽 (ひじりだき)」と呼称されている (賀川, 1983) ので, ここでは, 現地の呼び名を優先させることとする]

遺跡の特徴：標高240mに位置し, 洞穴の全長45m, 幅は平均1.68m, 高さは平均4m (賀川, 1967)

人骨部位：左右頭頂骨と後頭骨 [第7層人骨1] (小片, 1967)

前頭骨片 [第7層人骨2] (小片, 1967)

左距骨 [表面採集] (MATSU'URA, 1984)

系統分類：*Homo sapiens*

発見者：左右頭頂骨・後頭骨・前頭骨片：日本考古学協会日本洞穴遺跡調査特別委員会による発掘調査 (賀川, 1967・1971)

左距骨：鈴木忠司・山下秀樹・綿貫俊一 (MATSU'URA, 1984)

発見年：1962年10月8日～22日 [左右頭頂骨・後頭骨・前頭骨片] (小片, 1967)

1983年 [左距骨] (MATSU'URA, 1984))

伴出石器：細石核・細石刃・ナイフ形石器 (賀川, 1967). 黒曜石製の石器が26点出土しており, これらは, 佐賀県伊万里市の腰岳産と考えられる.

石器は, 細石刃・細石核・台形様石器・二次加工や使用痕のある剥片・小石核 (橋, 1981).

伴出獣骨：ツキノワグマの左尺骨の半月切痕内側 (小片, 1967)

年代分析：細石器文化を伴うとすれば, 約14,000-13,000年BP (MATSU'URA, 1999)

田辺義一によるフッ素分析で, 0.56% [頭頂骨と後頭骨] 及び0.55% [前頭骨] (小片, 1981)

骨のフッ素/リン比 [100×F(%) / P₂O₅(%)] は, 2.78 [左距骨] (MATSU'URA, 1984)

人骨形態：以下は, 小片 保 (1967・1981) による. 性別は女性で, 死亡年齢は成人. 後頭隆起が発達している. 骨壁がきわめて厚い. 中国の山頂洞人101号と似る.

保管場所：新潟大学医学部解剖学教室 [頭頂骨・後頭骨・前頭骨]

長崎大学歯学部口腔解剖学教室 [距骨]

レプリカ：現在のところ, 販売されていない.

コメント：日本の旧石器時代人骨のうち, 石器と人骨が伴って発見されているのは, この聖嶽洞穴人骨と岩戸人骨及び山下町第一洞穴人骨だけで

ある。

国立科学博物館の馬場悠男は、この骨は化石化が低い上に、骨壁が厚いという特徴は江戸時代人にも見られると発言している（岡村・松藤・木村・辻・馬場、1998）。

1983年に発見された左距骨の研究は、京都大学名誉教授の池田次郎と長崎大学歯学部の北川賀一が行っている。

1999年12月10日から24日まで、文部省科学研究費特定領域研究の「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」(代表者：尾本恵市)の内、考古学班(代表者：国立歴史民俗博物館の春成秀爾)に「聖嶽洞穴発掘調査団」が組織され、別府大学の橋 昌信を団長として再調査が行われ、石器2点と人骨百数十点が出土した。現在、人骨の研究は、群馬県立自然史博物館の楢崎修一郎を中心として行われている。

今後、1983年に発見された距骨と1999年に発見された人骨の詳細な記載が待たれる。また、人骨を資料とした、年代学的分析の進展が待たれる。

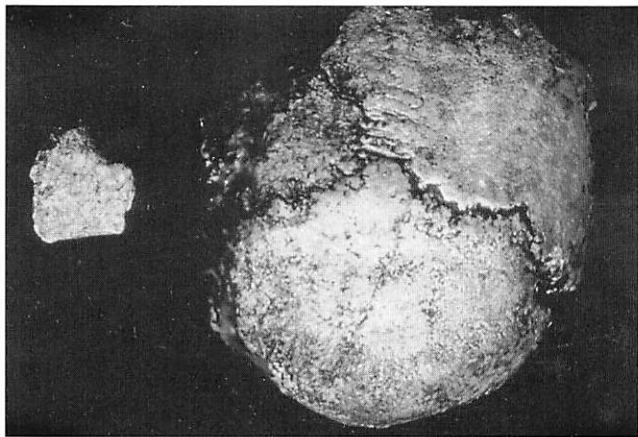


写真9：聖嶽出土人骨

引用文献

- 岡村道雄・松藤和人・木村英明・辻誠一郎・馬場悠男
1998 「シンポジウム日本の考古学1：旧石器時代の考古学」,
学生社, 354p. 東京.
- 賀川光夫
1967 大分県聖岳洞穴。「日本の洞穴遺跡」(日本考古学協会洞
穴遺跡調査特別委員会編), pp.278-283, 平凡社, 東京.
- 1971 聖嶽洞穴と旧石器時代人の発見。「大分県の考古学」,
pp.31-34, 吉川弘文館, 東京.
- 1983 大分県聖嶽洞穴遺跡：後期旧石器人骨の発見。「本匠村史」
(本匠村史編さん委員会編), pp.45-53, 本匠村.
- MATSUURA, Shuji
1984 Fluorine dating of a human talus from Hijiridake
Cave. *Bulletin of the National Science Museum, Tokyo*,

Series D, 10:1-7.

小片丘彦

- 1981 追記。「人類学講座5：日本人I」(小片 保編), p.26,
雄山閣出版, 東京.

小片 保

- 1967 洞穴遺跡出土の人骨所見序説。「日本の洞穴遺跡」(日本
考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編), p.382-392,
平凡社, 東京.

- 1981 13. 聖岳洞穴人. 旧石器時代人骨, 「人類学講座5：日本
人I」(小片 保編), p.14-22, 雄山閣出版, 東京.

橋 昌信

- 1981 大分県聖岳洞穴出土の石器. 別府大学博物館研究報告,
(5):15-20.

11. 岩戸

遺跡所在地：大分県大野郡清川村大字白尾字岩戸(坂田,
1980)

遺跡の特徴：72個の河原石を台状に配置した集積墓(坂田,
1980)

人骨部位：側頭骨鱗部2片, 上顎切歯, 右上顎犬歯破片
(内藤, 1980)

系統分類：*Homo sapiens*

発見者：岩戸遺跡調査団

発見年：1979年

伴出石器：第1次調査(1967年)で、ナイフ型石器・尖
頭器・スクレイパー・チョッパー・敲石等,
1384点が出土した。また、長さ約9.5cmのコ
ケン形石偶が出土している。

伴出獣骨：アワビ・インダタミを含む貝殻細片4点が出
土している。

年代分析：AT(始良Tnテフラ)層の直下であること
から、約24,000年BPと推定される

人骨形態：発見人骨は、皆、破片なので詳しい形態特徴
はわからない(内藤, 1980)。

保管場所：長崎大学医学部

レプリカ：現在のところ、販売されていない。

コメント：第1次調査は、東北大学文学部[当時]の芹
沢長介を中心として1967年8月26日～9月4日
まで行われた。第2次調査は、別府大学の坂
田邦洋を中心として1979年1月24日～2月5日
まで行われた。

日本の旧石器時代人骨のうち、石器と人骨
が伴って発見されているのは、この岩戸人骨
と聖嶽洞穴人骨及び山下町第一洞穴人骨だけ
である。しかしながら、岩戸遺跡出土人骨が
破片しかなく比較研究を行えないため、形態
的に判断をすることは難しい。

引用文献

内藤芳篤

1980 岩戸遺跡出土の人骨所見。「大分県岩戸遺跡」(坂田邦洋編), pp.455-459, 大分.

坂田邦洋

1980 「大分県岩戸遺跡」, 広雅堂、大分.

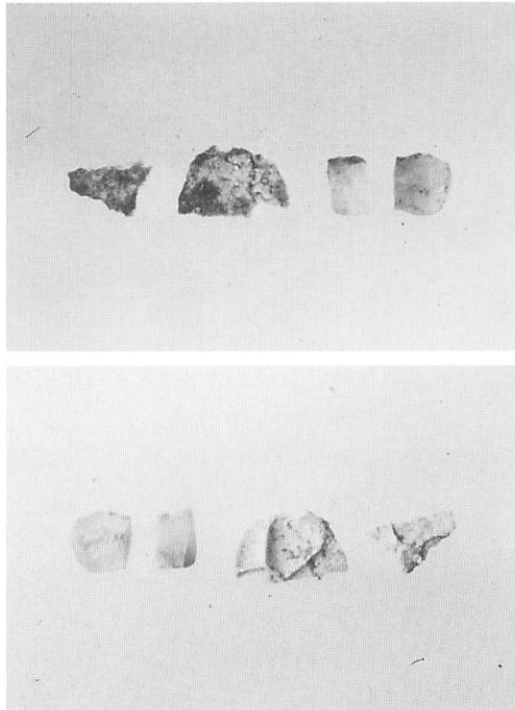


写真10：岩戸出土人骨（上：外面，下：内面）

トウバル
12. 桃原洞穴

遺跡所在地：沖縄県沖縄市北谷〔チャタン〕町桃原洞穴（鈴木, 1975）

遺跡の特徴：詳細は不明.

人骨部位：脳頭骨〔左側の前頭骨と頭頂骨の一部を欠く〕（鈴木, 1975・1983）

系統分類：*Homo sapiens*（鈴木, 1975・1983）

発見者：多和田真淳（藤野, 1983）。標本は、1966年に平良 進より鈴木 尚にもたらされた（鈴木, 1975）.

発見年：1966年（藤野, 1983）

伴出石器：発見されていない

伴出獣骨：シカ化石（藤野, 1983）

年代分析：田辺義一によるフッ素分析で、0.39%（鈴木, 1975）

人骨形態：以下は、鈴木（1975・1983・1998）による。長頭型で、低頭型。外耳道骨腫が認められる。形態学的には、更新世ではなく、中世または近世初めに由来したものと考えられる。

保管場所：東京大学総合研究博物館人類先史部門

レプリカ：現在のところ、販売されていない。

コメント：今後の年代学的研究が待たれる。

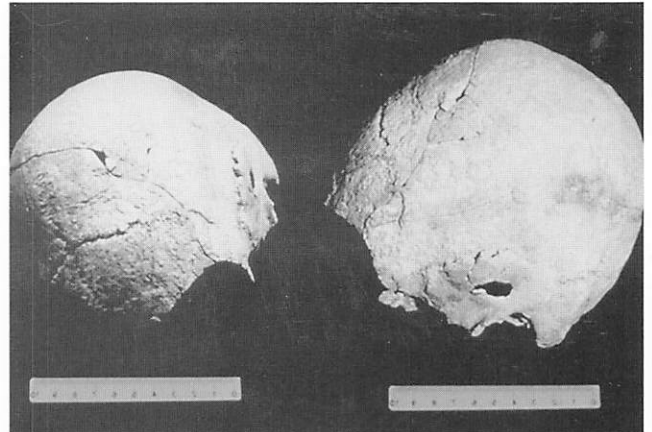


写真11：桃原洞穴出土人骨

引用文献

藤野雅之

1983 山下町第一洞穴。「日本の遺跡発掘物語1：旧石器時代」(森浩一監修), pp.275-301, 社会思想社、東京.

鈴木 尚

1975 沖縄県に於ける洪積世人類の発見. 人類学雑誌, 83:113-130.

1983 「骨から見た日本人のルーツ」, 岩波書店, 226p. 東京.

1998 「骨が語る日本史」, 学生社, 242p. 東京.

オオヤマ
13. 大山洞穴

遺跡所在地：沖縄県宜野湾市伊佐大山洞穴（鈴木, 1975）

遺跡の特徴：国道58号線わきの建築工事現場で、現在は破壊されすでに失われている（鈴木, 1975）

人骨部位：下顎骨の右大臼歯部（鈴木, 1975）

系統分類：*Homo sapiens*（鈴木, 1975・1983）

発見者：アメリカ人のダグラス・J・コムストック〔当時小学校6年生〕（藤野, 1983）。沖縄基地勤務の米国人の家族（鈴木, 1975・1983）。標本は、1966年に平良 進より鈴木 尚にもたらされた（鈴木, 1975）

発見年：1964年（藤野, 1983）

伴出石器：発見されていない

伴出獣骨：発見されていない

年代分析：田辺義一によるフッ素分析で、0.85%（鈴木, 1975）

人骨形態：以下は、鈴木（1975・1983・1998）による。X線像により、タウロドント（巨大歯髓腔症）を持つことがわかった。大臼歯の摩耗状態から、死亡年齢は約20歳と推定された。

保管場所：東京大学総合研究博物館人類先史部門

レプリカ：現在のところ、販売されていない。

コメント：今後の年代学的研究が待たれる。

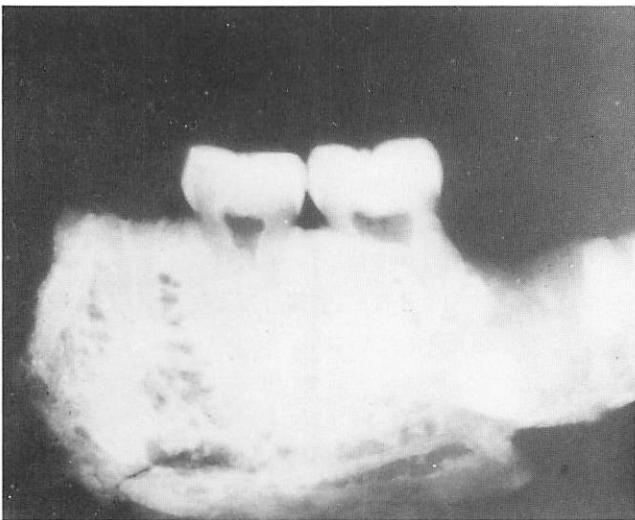
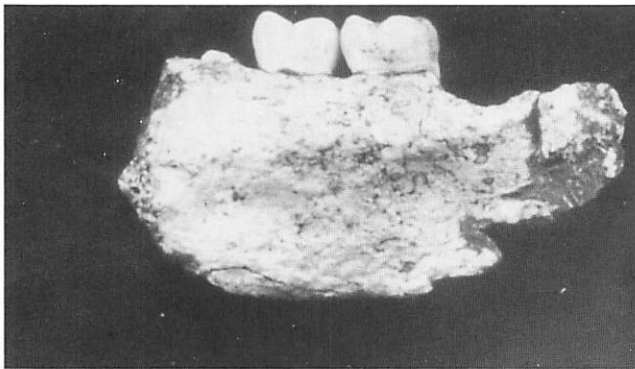


写真12：大山洞穴出土人骨（上：側面観，下：X線像）

引用文献

藤野雅之

1983 山下町第一洞穴。「日本の遺跡発掘物語1：旧石器時代」（森 浩一監修），社会思想社，p.275-301. 東京.

鈴木 尚

1975 沖縄県に於ける洪積世人類の発見. 人類学雑誌, 83:113-130.

1983 「骨から見た日本人のルーツ」, 岩波書店、東京.

1998 「骨が語る日本史」, 学生社, 242p. 東京.

ヤマシタチョウ

14. 山下町第一洞穴

遺跡所在地：沖縄県那覇市山下町1-67山下町第一洞穴
(鈴木, 1983・1998; SUZUKI, 1983)

遺跡の特徴：標高約15mの段丘上に立地し，開口部はほぼ南西に面しており，間口約1.2m，高さ3.2m，奥行き約5.5m（高宮・金武・鈴木, 1975；土, 1975）

人骨部位：右大腿骨と右脛骨（鈴木, 1983・1998; SUZUKI, 1983）

脛骨1・大腿骨1・腓骨1（高宮・金武・鈴木, 1975）

発見者：渡邊直経〔当時，東京大学教授〕を団長とする沖縄洪積世人類遺跡調査団が1968年12月26日から1969年1月6日にかけて行った調査で発見（高宮・金武・鈴木, 1975）.

発見年：1968年（高宮・金武・鈴木, 1975；鈴木, 1983・1998; SUZUKI, 1983）

系統分類：*Homo sapiens* (SUZUKI, 1983)

地層：堆積層の厚さは約3mで，5層から層にまで分けられ，人骨は第層から出土した.

伴出石器：多和田真淳と高宮広衛を中心として，1962年12月28日から31日にかけて行われた第1次調査（高宮・金武・鈴木, 1975）で，礫器1点及び石弾2点の合計3点の石器が出土している（高宮・玉城・金武, 1975）. 但し，この石器については，疑問点も指摘されている（埴原, 1994；小田, 2000）.

伴出獣骨：骨角器（高宮・玉城・金武, 1975）

シカ [*Metacervulus astylodon*] (高井, 1975)

年代分析：C-14法で， $32,100 \pm 1,000$ 年BP〔TK-78〕（KOBAYASHI・MATSUI・SUZUKI, 1971）

人骨形態：以下は，鈴木（1983・1998）とSUZUKI（1983）による.

発見された骨は，下端部を欠く右大腿骨と右脛骨である. 骨片の長さは，大腿骨で約180mm，脛骨で約140mm. 復元した最大長は，大腿骨で約260mm，脛骨で約200mm. 骨の形や大きさより，約7歳と考えられる. 大腿骨後面の大腿骨稜が現代人よりも隆起し，柱状大腿骨に近い形をしている.

TRINKAUS & RUFF (1996) は，山下町人骨を再研究し，鈴木の研究とは異なり，復元した最大長を大腿骨で約245mm，骨幹長を約218mmと推定し直し，死亡年齢を約6歳と推定している. また，脛骨に3本のハリス線が認められるとし，形態には古代型ホモ・サピエンスと現代人とのモザイクが見られると発表している.

保管場所：東京大学総合研究博物館人類先史部門

レプリカ：現在のところ、販売されていない。

コメント：日本の旧石器時代人中、数値年代が判明しているものでは最古の人骨である。

高宮・金武・鈴木(1975)の報告によると、鈴木尚が報告した大腿骨と脛骨(鈴木, 1983・1998; SUZUKI, 1983)以外に腓骨が出土しているようだが、その記載はされていない。

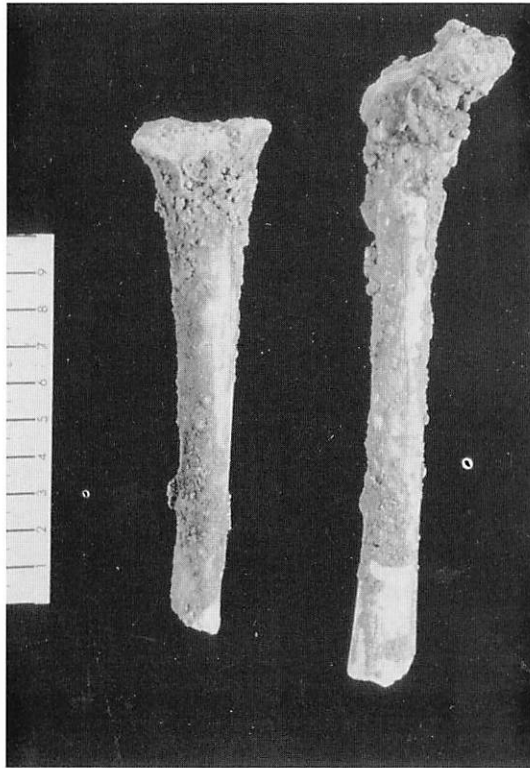


写真13：山下町第一洞穴出土人骨

引用及び参考文献

植原和郎

1994 「日本人の起源(増補)」, 朝日新聞社, 262p. 東京.

KOBAYASHI, H・MATSUI, Y.・SUZUKI, H.

1971 University of Tokyo radiocarbon measurements IV. *Radiocarbon*, 13:97-102.

小田静夫

2000 「黒潮圏の考古学」, 第一書房, 278p. 東京.

鈴木 尚

1983 「骨から見た日本人のルーツ」, 岩波書店, 226p. 東京.

1998 「骨が語る日本史」, 学生社, 242p. 東京.

SUZUKI, Hisashi

1983 The Yamashita-cho Man. *Bull. et Mem. de la Soc. d'Anthrop. de Paris*, 13(10):81-87.

高井冬二

1975 山下町第1洞発見の鹿化石. 人類学雑誌, 83(3):280-293.

高宮広衛・金武正紀・鈴木正男

1975 那覇山下町洞穴発掘経過報告. 人類学雑誌, 83(2):125-130.

高宮広衛・玉城盛勝・金武正紀

1975 山下町洞穴出土の人工遺物. 人類学雑誌, 83(2):137-150.

TRINKAUS, Erik & RUFF, Christopher B.

1996 Early modern human remains from eastern Asia: the Yamashita-cho I immature postcrania. *Journal of Human Evolution*, 30:299-314.

土 隆一

1975 沖縄本島南部の地質と山下町洞穴の形成. 人類学雑誌, 83(2):131-136.

ミナトガワ

15. 港川

遺跡所在地：沖縄県具志頭村港川 (SUZUKI & HANIHARA, 1982)

人骨部位：全身骨格 (SUZUKI & HANIHARA, 1982)

系統分類：*Homo sapiens*

発見者：大山盛保(1968年), 沖縄洪積世人類遺跡調査団(1968年から1974年)

発見年：1970年8月～1971年1月

伴出石器：発見されていない

伴出獣骨：リュウキュウジカ, リュウキュウムカシキョン, リュウキュウイノシシ?, ケナガネズミ, トゲネズミ, ヤンバルクイナ, ハブ等.

獣骨の出土状況は, 上の地層にはリュウキュウイノシシ?が多く, 下の地層にはリュウキュウジカとリュウキュウムカシキョンが出る(長谷川, 1980).

年代分析：C-14法で, 18,250 ± 650年 BP [TK-99] と16,600 ± 300年 BP [TK-142]

(KOBAYASHI・HIROSE・SUGINO・WATANABE, 1974)

ウラン-プロトアクチニウム法で, 19,200 ± 1,800年前(横山, 1992)

ウラントリウム法で, 19,200年前(鈴木, 1998:横山祐之による)

フッ素分析値は, 1.29% [I号頭骨]・0.87% [II号頭骨]・1.00% [IV号頭骨]・1.20% [下顎骨A]・1.51% [脊椎骨]・1.27% [肋骨]・1.43% [指骨]・1.65% [中足骨] (MATSU'URA, 1982)

人骨形態：以下は, SUZUKI (1982) とBABA & ENDO (1982) とHANIHARA & UETA (1982) による. 全身骨格は4体分[港川I～IV, 但しIIIは頭骨を欠く]. 遊離下顎骨は, 4個発見されている[ACDは若い女性で, Bは男性]. 個体数は, 少なくとも5体と考えられ, その内, 2体が男性で3体が女性であると推定されている. 推定身長は, 男性[港川I]で155cm,

女性〔港川Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ〕の平均で144cm。脳容量は、男性〔港川Ⅰ〕で1,390cc、女性〔港川Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ〕の平均で1,130cc。頭骨は、縄文時代人とよく似ている。また、中国の柳江人との類似も指摘されている。

下顎骨Aには、抜歯が認められ、国内最古の抜歯例と考えられる。

国立科学博物館の馬場悠男と群馬県立自然史博物館の橋崎修一郎等は、港川Ⅰ号頭骨の研究から、インドネシアのジャワ島出土のワジャック人との類縁関係を見いだしている（BABA・NARASAKI・OHYAMA, 1998）。

保管場所：東京大学総合研究博物館人類先史部門

レプリカ：ゼネラル・サイエンス・コーポレーションより、港川Ⅰ号頭骨・Ⅱ号頭骨・Ⅳ号頭骨・下顎骨Aの4点が販売されている。

コメント：港川では、以下の発掘調査が行われた。

1968年12月25日～1969年1月7日・第1次沖縄
 洪積世人類遺跡調査団〔団長・渡邊直経東京
 大学教授（当時）〕

1970年12月20日～1971年1月10日・第2次沖
 縄洪積世人類遺跡調査団〔団長・田辺義一
 お茶の水女子大学教授（当時）〕

1974年12月23日～12月29日・第3次沖縄
 洪積世人類遺跡調査団〔団長・土隆一静岡
 大学教授（当時）〕

1998年から三ヶ年の予定で、具志頭村教育
 委員会が沖縄県教育庁文化課の協力の元で再
 調査を行っているが、現時点で人骨の追加発
 見はない。

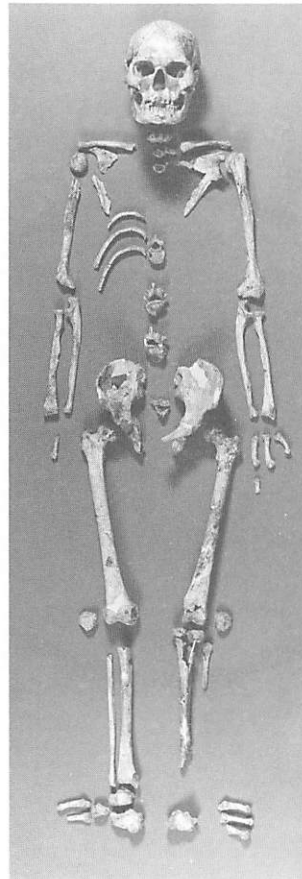


写真14：港川Ⅰ号全身骨格

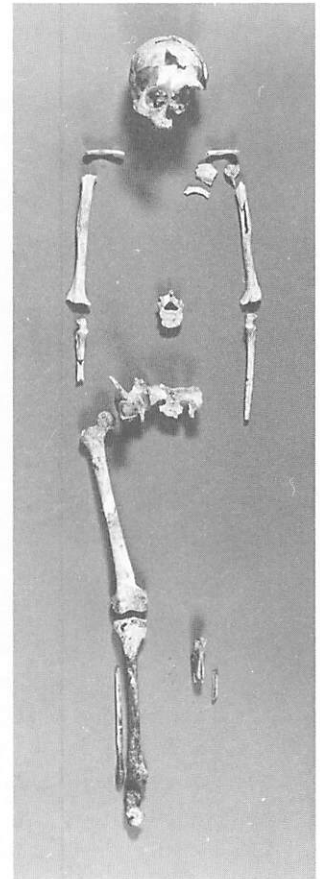


写真15：港川Ⅳ号全身骨格

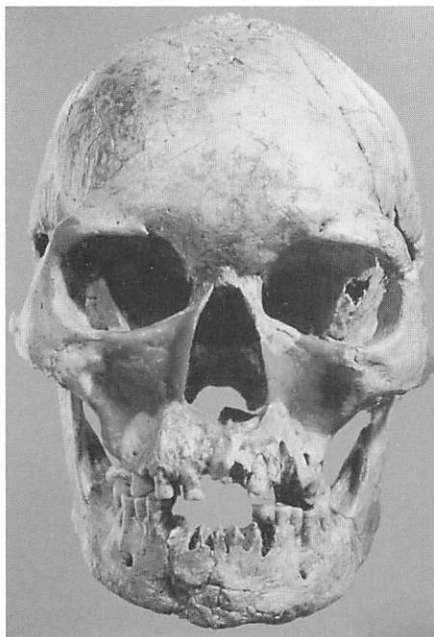


写真16：港川Ⅰ号

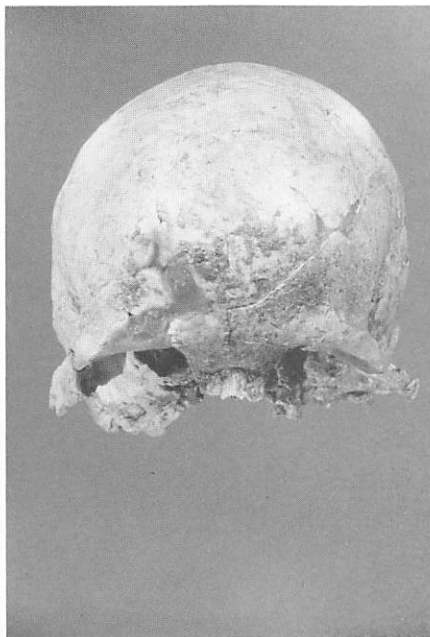


写真17：港川Ⅱ号

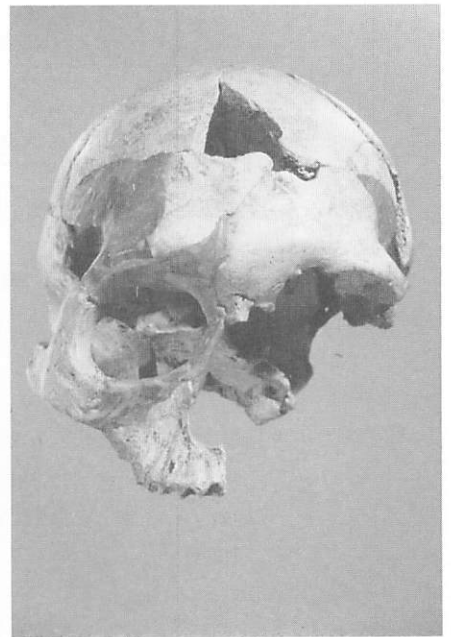


写真18：港川Ⅳ号

引用及び参考文献：

- BABA, H. & ENDO, B.
1982 Postcranial skeleton of the Minatogawa Man, In: SUZUKI, H. & HANIHARA, K. (eds.): *Minatogawa Man*, The University Museum, The University of Tokyo, Bulletin (19):61-195.
- BABA, H. & NARASAKI, S.
1991 Minatogawa Man, the Oldest Type of Modern Homo sapiens in East Asia, *The Quaternary Research*, 30(2): 221-230.
- BABA, H. ・NARASAKI, S. ・OHYAMA, S.
1998 Minatogawa Hominid Fossils and the Evolution of Late Pleistocene Humans in East Asia, *Anthropological Science*, 106 (Supplement):27-45.
- HANIHARA, K. & UEDA, H.
1982 Dentition of the Minatogawa Man, In:SUZUKI, H. & HANIHARA, K. (eds.): *Minatogawa Man*, The University Museum, The University of Tokyo, Bulletin (19): 51-59.
- 長谷川善和
1980 琉球列島の後期更新生の脊椎動物, 第四紀研究, 18(4): 263-267.
- KIMURA, T. & TAKAHASHI, H
1984 On the Cross Section of Lower Limb Long Bones in Minatogawa Man from Okinawa, *Journal of Anthropological Society of Nippon*, 92(2):69-78.
- KOBAYASHI, H. ・HIROSE, T. ・SUGINO, M. ・WATANABE, N.
1974 TK-99: Minatogawa, *Radiocarbon*, 16:384.
- MATSU'URA, S.
1982 Relative Dating of the Minatogawa Man by Fluorine Analysis. In:SUZUKI, H. & HANIHARA, K. (eds.): *Minatogawa Man*, The University Museum, The University of Tokyo, Bulletin (19):205-208.
- SUZUKI, H.
1982 Skulls of the Minatogawa Man. In : SUZUKI, H. & HANIHARA, K. (eds.):*Minatogawa Man*, The University Museum, The University of Tokyo, Bulletin (19):7-49.
- 鈴木 尚
1983 「骨から見た日本人のルーツ」, 岩波書店, 226p. 東京.
1996 「骨」, 学生社, 237p. 東京.
1998 「骨が語る日本史」, 学生社, 242p. 東京.
- 横山祐之
1992 現代人の起源を探る. 科学, 62:195-196.

ジョウブミナトガワ
16. 上部港川

遺跡所在地：沖縄県具志頭村港川（松浦，1984）

人骨部位：右上腕骨，右尺骨，左腸骨，右大腿骨（2），
右脛骨，左脛骨，右距骨，左第1中足骨（馬
場，1984）

系統分類：*Homo sapiens*

発見者：大山盛保（松浦，1984）

発見年：1968年3月（松浦・近藤，2000）

伴出石器：発見されていない

伴出獣骨：リュウキュウジカ，リュウキュウムカシキョ
ン，イノシシ等.

年代分析：フッ素分析で，0.78%～1.32%（松浦，1984）

人骨形態：以下は，馬場（1984）による

右上腕骨骨体上部・男性

右尺骨上1/3・女性？

左腸骨下半・男性

右大腿骨上半・男性

右大腿骨下1/3・男性

右脛骨下1/3・男性

左脛骨体中央部・男性

右距骨・男性

左第1中足骨・男性

上記の人骨のうち，尺骨は他とは別の個体と
なる．大腿骨も別の個体．左右脛骨と距骨は
同一個体の可能性大．その他は不明．

上部港川人骨の四肢骨の形態は，縄文時代人
の四肢骨と似る．

保管場所：国立科学博物館人類研究部

レプリカ：現在のところ，販売されていない．

コメント：形態に関して，詳細な報告が出版されること
が望まれる．化石骨のラセミ化分析から，約
12,000年前より古いと推定されているが，予
察的であり（MATSU'URA, 1999；松浦・近
藤，2000），今後の年代学的研究の進展が待
たれる．



写真19：上部港川出土人骨

1. 右上腕骨， 2. 右尺骨， 3. 左第1中足骨，
4. 右大腿骨， 5. 左腸骨， 6. 右大腿骨，
7. 左脛骨， 8. 右脛骨， 9. 右距骨

引用文献

馬場悠男

1984 上部港川人骨の形態. 人類学雑誌, 92(2):112.

松浦秀治

1984 上部港川人骨のフッ素年代判定. 人類学雑誌, 92(2):111-112.

MATSU'URA, Shuji

1999 A chronological review of Pleistocene human remains from the Japanese Archipelago. *International Symposium* No. 11-B: 181-197, International Research Center for Japanese Studies.

松浦秀治・近藤 恵

2000 日本列島の旧石器時代人骨はどこまでさかのぼるか: 化石骨の年代判定法. 「考古学と化学を結ぶ」(馬淵久夫編), 東京大学出版会, 東京. (印刷中)

カダバル
17. カダ原洞穴

遺跡所在地: 沖縄県伊江村(伊江島)ミナト原地内カダ原洞穴 [鈴木(1975)は, 「カタ原」と記載しているが, 現地では「カダ原」と記載している(藤野, 1983)ので, ここでは, 現地の呼び名を優先させることとする]

人骨部位: 左頭頂骨の後内側部(鈴木, 1975)

系統分類: *Homo sapiens* (鈴木, 1975)

発見者: 多和田真淳(鈴木, 1983). 標本は, 1966年に平良 進より鈴木 尚にもたらされた(鈴木, 1975)

発見年: 1962年(鈴木, 1983)

伴出石器: 石英製打製石器 [スモモ形] 1点, 礫器? 2点(沖縄県文化振興会・公文書館史料編集室, 1998)

伴出獣骨: シカ(藤野, 1983)

年代分析: 田辺義一によるフッ素分析で, 0.42%(鈴木, 1975)

人骨形態: 以下は, 鈴木(1975・1983・1998)による. 人骨は, 2個の破片に分かれている. 化石化

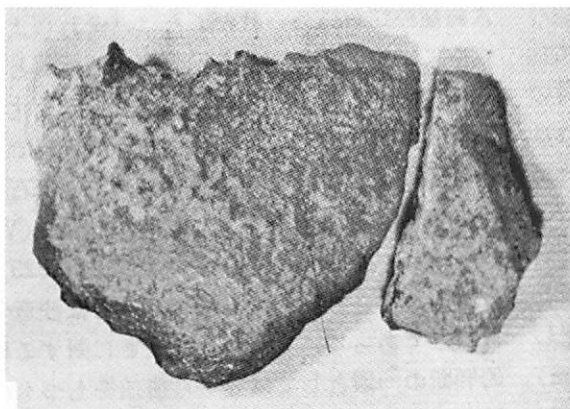


写真20: カダ原洞穴出土人骨(外面)

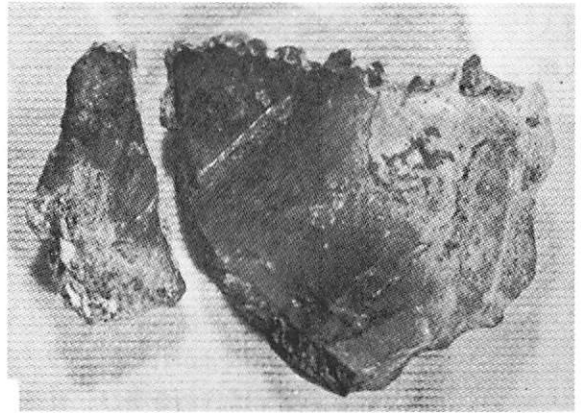


写真20: カダ原洞穴出土人骨(内面)

の程度は強い. 骨の厚さは, 約6mmから10mmである.

保管場所: 東京大学総合研究博物館人類先史部門

レプリカ: 現在のところ, 販売されていない.

コメント: 将来, 数値年代の測定が望まれる.

引用文献

藤野雅之

1983 山下町第一洞穴. 「日本の遺跡発掘物語1: 旧石器時代」(森 浩一監修), pp.275-301, 社会思想社, 東京.

沖縄県文化振興会・公文書館史料編集室

1998 「沖縄県史ビジュアル版2: 考古1」, 沖縄県教育委員会, 56p. 沖縄.

鈴木 尚

1975 沖縄県に於ける洪積世人類の発見. 人類学雑誌, 83:113-130.

1983 「骨から見た日本人のルーツ」, 岩波書店, 226p. 東京.

1998 「骨が語る日本史」, 学生社, 242p. 東京.

18. ゴヘズ洞穴

遺跡所在地: 沖縄県伊江村(伊江島)ゴヘズ洞穴

遺跡の特徴: 標高約82mに位置し, 開口部は約2m, 奥行きは約19m

人骨部位: 左下顎骨 [第1次調査](池田, 1977)

前頭骨・左側頭骨・左上腕骨・右大腿骨・左脛骨・右腓骨・右中足骨・中手骨2点・手指の基節骨・上顎切歯2点 [第2次調査](山口, 1978)

系統分類: *Homo sapiens*

発見者: 伊江村教育委員会による, 第1次調査と第2次調査

発見年: 1976年9月5日から9月15日(第1次調査)[左下顎骨] 1977年7月16日から7月22日(第2次調査)[左下顎骨以外の骨]

伴出石器: 発見されていない

伴出獣骨: コキクガシラコウモリ, アマミトゲネズミ, リュウキュウジカ, リュウキュウムカシキョ

ン、ウミガメ類、オオヤマリクガメ、リュウキュウヤマガメ、ヤモリ類、キノボリトカゲ類、ハブ、ハシブトガラス（長谷川，1977，長谷川・野原・野苺谷・小野，1978）

以前，骨角器と考えられた獣骨は，シカが獐分の不足を補うために草食動物の骨を咬むオステオファギアの結果だと考えられている（加藤・長谷川・大山・川島・大城，1978）

年代分析：下顎骨は，後期更新世後期の可能性が示唆される。（松浦，1977）

人骨形態：第1次調査で発見された下顎骨は，性別は女性の可能性が高く，死亡年齢は歯の咬耗度から30歳前後と推定される（池田，1977）。

第2次調査で発見された人骨は，性別や死亡年齢を推定するには難しい（山口，1978）。

保管場所：沖縄県教育委員会

レプリカ：現在のところ，販売されていない。

コメント：今後，人骨を資料とした年代学的研究の進展が望まれる。

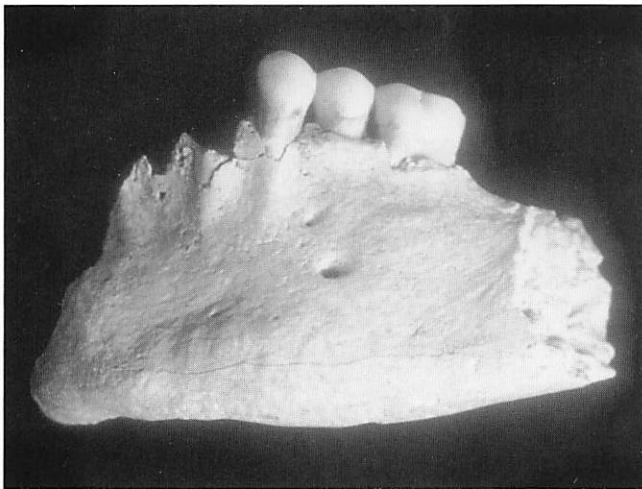


写真21：ゴヘズ洞穴出土人骨（下顎骨）

引用文献

長谷川善和

1977 ゴヘズ洞の獣類遺骸群集。「沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査：第1次概報」，p.13，伊江村教育委員会，伊江村。

長谷川善和・野原朝秀・野苺家宏・小野慶一

1978 ゴヘズ洞の獣類遺骸群集。「沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査：第2次概報」，pp.8-17，伊江村教育委員会，伊江村。

池田次郎

1977 下洞出土の人骨。「沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査：第1次概報」，p. 14，伊江村教育委員会，伊江村。

加藤晋平・長谷川善和・大山盛保・川島由次・大城逸朗

1978 摩耗痕のある鹿角について。「沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査：第2次概報」，pp.5-6，伊江村教育委員会，伊江村。

松浦秀治

1977 ゴヘズ洞出土鹿化石骨のウラン分析。「沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査：第1次概報」，p.15，伊江村教育委員会，伊江村。

山口 敏

1978 ゴヘズ洞出土の人骨について。「沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査：第2次概報」，pp.18-21，伊江村教育委員会，伊江村。

19. 下地原洞穴

遺跡所在地：沖縄県具志川村（久米島）字具志川北原下地原洞（長谷川・佐倉，1983）

遺跡の特徴：洞穴の全長は約185m，洞幅は平均約10m，天井高は約8m（長谷川・佐倉，1983）

人骨部位：乳幼児骨の全身骨格で，約50点出土しているが同一個体と考えられる（佐倉，1983；SAKURA，1988）

系統分類：*Homo sapiens*

発見者：長谷川善和と大城逸郎，沖縄県立博物館による第2次調査（佐倉，1983）

国立科学博物館を中心とした第3次調査（SAKURA，1988）

発見年：1983年1月〔下顎骨右半・右鎖骨・左右肩甲骨片・右上腕骨・右大腿骨・脊椎骨・肋骨〕（佐倉，1983）

1986年11月～12月〔頭骨片・脊椎骨・肋骨・尺骨・腓骨・中手骨〕（SAKURA，1988）

伴出石器：発見されていない

伴出獣骨：リュウキュウジカ，リュウキュウムカシキョン等（長谷川・佐倉，1983）

年代分析：C-14法で，15,200±100年BP（佐倉，1983）
松浦秀治によるラセミ化分析で，約2～1.5万年前（佐倉，1983）

松浦秀治によるフッ素分析値は，0.21%〔上腕骨〕・0.48%〔大腿骨〕（佐倉，1983；SAKURA，1988）

人骨形態：以下は，佐倉（1983）及びSAKURA（1988）による。

下顎体内面に観察される第2乳臼歯の歯胚洞の大きさより，死亡年齢は，生後8～10ヶ月と推定される。

下顎骨・正中部から下顎頭まで約55mm

上腕骨・長さ約70mm

大腿骨・骨端を除く長さ約85mm

保管場所：国立科学博物館人類研究部（暫定的）

レプリカ：現在のところ，販売されていない。

コメント：日本の旧石器時代人骨で，乳幼児骨が発見されているのは，本遺跡のみである。将来，形態及び年代についての詳細な報告が出版されることが望まれる。



写真22：下地原洞出土人骨（下顎骨）

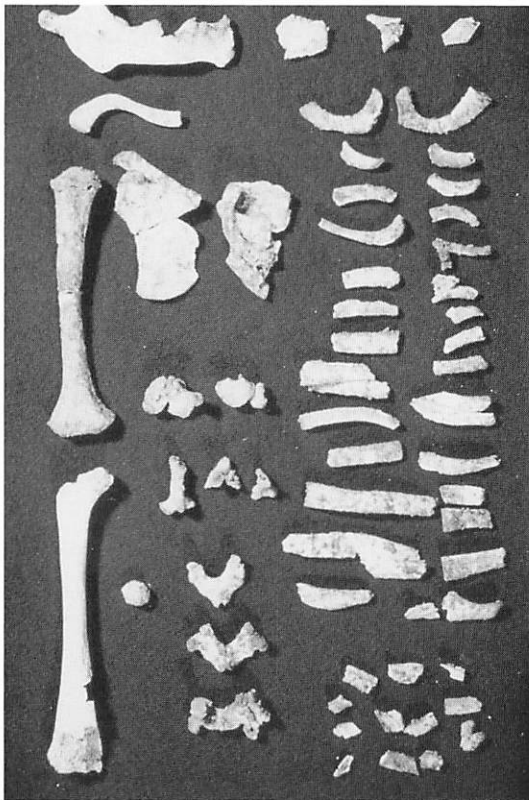


写真23：下地原洞出土人骨（全身骨格）

20. ピンザアブ

遺跡所在地：沖縄県上野村（宮古島）豊原ピンザアブ [山羊洞]（佐倉，1985）

人骨部位：頭頂骨，後頭骨，尖頂骨，第5腰椎，第1中手骨，手指末節骨，下右乳犬歯，下左第2切歯，上左第2小臼歯（佐倉，1985）

系統分類：*Homo sapiens*

発見者：大城逸郎・新垣義夫 [後頭骨]（佐倉，1985）

長谷川善和 [後頭骨小片・尖頂骨・頭頂骨・第5腰椎・下右乳犬歯]（佐倉，1985）

沖縄県教育委員会文化課第1次調査 [上左第2小臼歯・下左第2切歯]（佐倉，1985）

沖縄県教育委員会文化課第2次調査 [頭頂骨片・右第1中手骨・手指末節骨]（佐倉，1985）

発見年：1979年8月 [後頭骨]（佐倉，1985）

1980年12月 [後頭骨小片・尖頂骨・頭頂骨・第5腰椎・下右乳犬歯]（佐倉，1985）

1982年11月 [上左第2小臼歯・下左第2切歯]（佐倉，1985）

1983年7月～8月 [頭頂骨片・右第1中手骨・手指末節骨]（佐倉，1985）

伴出石器：発見されていない

伴出獣骨：ハブ，キノボリトカゲ，アオカナヘビ，オオヤマガメ，ミナミイシガメ，アジアヒキガエル，ヒメアマガエル，ケナガネズミ，ハタネズミ，ヤマネコ，イノシシ（本州・九州型），ミヤコノロジカ（長谷川，1985）

年代分析：C-14法で， $25,800 \pm 900$ 年BP [木炭・TK-535]・ $26,800 \pm 1,300$ 年BP [木炭・TK-605]（浜田，1985）

ラセミ化法で，約20,000年前（松浦，1985）

フッ素分析値は，0.655% [頭頂骨]（松浦，1985）

人骨形態：以下は，佐倉（1985）とSAKURA（1981）による。

後頭骨：性別は，男性の可能性が高い。死亡年齢は，比較的若い壮年。弱い横後頭隆起が認められ，原始性がうかがえる。

頭頂骨：性別は，男性の可能性が高い。死亡年齢は，比較的若い壮年。

第5腰椎：性別は，女性の可能性が高い。死亡年齢は，壮年。

まとめとして，全体的に，港川人よりも原始性が高い。

保管場所：国立科学博物館人類研究部（暫定的）

レプリカ：現在のところ，販売されていない。

コメント：人骨を試料とした，C-14年代の測定が望ま

引用文献

長谷川善和・佐倉 朔

1983 更新世の乳児化石，沖縄で発見。科学朝日，1983年5月号，p.52-53.

佐倉 朔

1983 久米島で発見された更新世乳幼児骨。人類学雑誌，92(2):149.

SAKURA, Hajime

1988 Additional finding of Pleistocene infant bones excavated at Shimojibaru cave, Kume Island, Okinawa. 人類学雑誌，96(2):202.

れるが、お茶の水女子大学の松浦秀治が予備的に行った研究では、コラーゲンの残存状態が悪かったという。

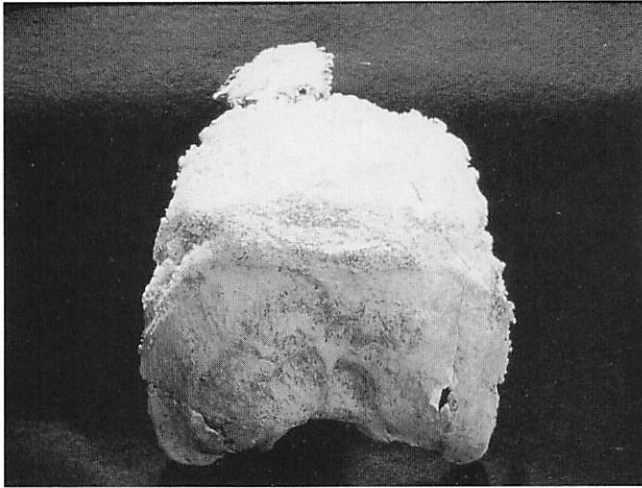


写真24：ピンザアブ出土人骨（後頭骨及び尖頂骨）

引用文献

浜田隆士

1985 ^{14}C 年代測定。「ピンザアブ洞穴発掘調査報告」, p.180, 沖縄県教育委員会, 那覇.

長谷川善和

1985 ヴェルム氷期における宮古島ピンザアブ洞窟堆積物からの脊椎動物遺跡群

松浦秀治

1985 ピンザアブ洞穴出土化石骨のフッ素含量測定とラセミ化分析。「ピンザアブ洞穴発掘調査報告」, pp.177-179, 沖縄県教育委員会, 那覇.

SAKURA, Hajime

1981 Pleistocene human bones found at Pinza-Abu (Goat Cave), Miyako Island-A short report. *Bulletin of National Science Museum, Tokyo*, Ser. D, 7:1-6.

佐倉 朔

1985 ピンザアブ出土人骨化石。「ピンザアブ洞穴発掘調査報告」, pp.161-176, 沖縄県教育委員会, 那覇.

タイシャクカンノドウ

追記：帝釈観音堂洞穴

遺跡所在地：広島県神石郡神石町永野観音堂洞穴（松崎，1969；篠崎，1983）

部 位：ニホンジカの第1，第2枝間の角幹（長谷川・山口，1981）

[当初，ヒトの左大腿骨と判定されていた（小片，1976）]

発 見 者：広島大学文学部考古学教室帝釈峡遺跡群発掘調査団 [団長・松崎寿和広島大学教授（当時）]

発 見 年：1974年8月11日（渡邊，1981）

伴出石器：無し

伴出獣骨：ニホンジネズミ，ニホンモグラジネズミ，ミスネズミ，ニホンムカシハタネズミ，タヌ

キ，キツネ，ヒグマ，ヒョウ，ゾウ科，シカ属（ニホンジカ及びニホンムカシジカ）等（河村，1992）

年代分析：MATSU'URA & UETA (1980)のラセミ化分析データを基に再計算の結果，約3.2万年前の値が得られている（河村，1992）

コメント：本人骨は，1974年に発見され，小片 保 [当時，新潟大学医学部] により成人左大腿骨と記載されて以来，「帝釈観音堂人第1号」として旧石器時代人骨と考えられていた（小片，1976）。その後，長谷川善和 [当時，国立科学博物館] に標本のクリーニングと模型製作が依頼され，石灰華の除去作業を行ったところ，ニホンジカの角の表面に特有の顆粒状彫刻紋様が出現したため，小片 保・長谷川善和・山口 敏 [当時，国立科学博物館] の三者で1979年11月に標本の再検討を行い，結論の発表は小片 保が行う予定だったが，1980年1月に小片が急逝したために，長谷川善和と山口 敏が発表した（長谷川・山口，1981）。ニホンジカの角幹であるという結論は，ヒトの大腿骨とシカの角との比較組織学的研究からも支持された（小泉，1981）。

引用文献

長谷川善和・山口 敏

1981 帝釈観音堂人第1号の再検討。「帝釈峡遺跡群発掘調査年報」, p.99, 広島大学文学部, 広島.

河村善也

1992 広島県帝釈遺跡群における哺乳類の層序的分布. 第四紀研究, 31(1):1-12.

小泉政啓

1981 帝釈観音堂人第1号の組織学的観察。「帝釈峡遺跡群発掘調査年報」, pp.95-98, 広島大学文学部, 広島.

MATSU'URA, Shuji & UETA, Nobuo

1980 Fraction dependent variation of aspartic acid racemization age of fossil bone. *NATURE*, 286: 883-884.

松崎寿和

1969 「帝釈原人」, 学生社, 246p. 東京.

小片 保

1976 帝釈峡遺跡群人骨略報。「帝釈峡遺跡群」(帝釈峡遺跡群発掘調査団編), pp.193-200, 亜紀書房, 東京.

篠崎義博

1983 帝釈峡遺跡群。「日本の遺跡発掘物語1：旧石器時代」(森浩一監修), pp.225-250, 社会思想社, 東京.

渡邊直経

1981 帝釈観音堂人第1号の鑑定について。「帝釈峡遺跡群発掘調査年報」, pp.100-101, 広島大学文学部, 広島.

ま と め

謝 辞

これまでに、日本で発見されている旧石器時代人骨を総括した。リスト上では、20遺跡があげられた。

1. 遺跡の所在地の特徴

- (1) 北海道・東北地方には、全く分布していない
- (2) 20遺跡中、本州及び四国に約半分の11遺跡が分布している。
- (3) 20遺跡中、沖縄県に約半分の9遺跡が分布している。

2. 人骨かどうか〔帝釈観音堂洞穴を除く〕

- (1) 人骨ではないと判明したもの：葛生（一部）
- (2) 人骨ではないとの疑いがあるもの：牛川

3. 人骨の残存

- (1) 港川の2体と下地原洞穴の1体以外は、すべて、一部しか出土していない

4. 人骨と石器の伴出

人骨と石器が伴出した遺跡は、鹿野川・聖嶽・岩戸・山下町第一洞穴の4遺跡である。但し、鹿野川は詳細な報告が出版されておらず、山下町第一洞穴は考古学者から疑問も提出されているので、聖嶽洞穴と岩戸の2遺跡となる。

5. 時代

- (1) 20遺跡中、放射年代が報告されている遺跡は、浜北・三ヶ日・山下町第一洞穴・港川・下地原洞穴・ピンザアの6遺跡しかなく、他の遺跡についてもこれからの研究が待たれる。
- (2) 出土人骨で更新世ではないとの疑いがあるものには、日本橋・泊洞穴・明石・夜見ヶ浜・聖嶽洞穴・岩戸・桃原洞穴の7遺跡出土資料があり、その結果、旧石器時代人骨の遺跡としては、11遺跡にその数が減ることになる。

更に問題点としては、以下が挙げられる

1. 20遺跡中、最初の報告以来、人骨の形態学的研究が別の研究者により再研究されたものは、葛生・明石・港川の3遺跡しかなく、これからの再研究が待たれる。
2. 20遺跡中、考古学的な再発掘が行われた遺跡は、明石・聖嶽洞穴・港川の3遺跡しかなく、これからの再調査が待たれる。
3. 北海道・東北地方からの旧石器時代人骨の発見が待たれる。

本稿を作成するにあたり、様々なコメントや文献及び写真の入手で以下の諸先生方に大変お世話になりました。ここに記して、感謝いたします（ABC順）。

国際日本文化研究センター研究部教授の赤澤 威先生、東北大学医学部教授の百々幸雄先生、東京大学名誉教授の遠藤萬里先生、東京大学名誉教授及び国際日本文化研究センター名誉教授の埴原和郎先生、国立歴史民俗博物館考古研究部長の春成秀爾先生、群馬県立自然史博物館館長で横浜国立大学名誉教授の長谷川善和先生、京都大学名誉教授の池田次郎先生、別府大学名誉教授の賀川光夫先生、京都大学霊長類研究所教授の片山一道先生、長崎大学医療技術短期大学部教授の加藤克知先生、長崎大学名誉教授の内藤芳篤先生、東京都教育庁生涯学習課学芸員の小田静夫先生、鹿児島大学名誉教授の小片丘彦先生、故大山盛保氏、別府大学文学部の坂田邦宏先生、札幌学院大学教授の佐倉 朔先生、東京大学名誉教授の鈴木 尚先生、別府大学教授の橋 昌信先生、東京大学名誉教授の故渡邊直経先生、国立科学博物館動物研究部室長の山田 格先生、国立科学博物館名誉館員の山口 敏先生、愛知学院大学教授の吉岡郁男先生。

Abstract

Palaeolithic Hominids of Japan

Shuichiro NARASAKI¹・Hisao BABA²・Shuji MATSU'URA³・Megumi KONDO³¹*Department of Anthropology, Gunma Museum of Natural History*²*Department of Anthropology, National Science Museum, Tokyo*³*Faculty of Human Life & Environmental Science, Ochanomizu University*

In this paper, we review Palaeolithic hominids of Japan. The site list reaches 20 sites from Tochigi prefecture to Okinawa prefecture. They are, Kuzuu (Tochigi), Nihonbashi (Tokyo), Tomari Cave (Toyama), Hamakita (Shizuoka), Mikkabi (Shizuoka), Ushikawa (Aichi), Akashi (Hyogo), Yomigahama (Tottori), Kanogawa (Ehime), Hijiridaki Cave (Oita), Iwado (Oita) Tobaru, Cave (Okinawa), Oyama Cave (Okinawa), Yamashitacho Cave I (Okinawa), Minatogawa (Okinawa), Upper Minatogawa (Okinawa), Kadabaru Cave (Okinawa), Gohezu Cave (Okinawa), Shimojibaru Cave (Okinawa), and Pinza-abu (Okinawa).

However, the bone specimen from the Taishaku Kannondo cave and part of Kuzuu remains are non-human. Also, there are some doubt on the hu-

man status of the Ushikawa humerus. Additionally, Nihonbashi, Tomari Cave, Akashi, Yomigahama, Iwado, and Tobaru Cave are doubted on the antiquity of bones.

Therefore, the Palaeolithic hominids in Japan reduced the number from 20 to 11 sites. We point out several problems on the Palaeolithic hominids of Japan.

1. Further chronometric dating studies must be needed.

2. No hominid remains have been yet found from Hokkaido and Tohoku District, and few from Shikoku District.

3. Re-studies on the morphology of the hominid remains are necessary.

梶崎修一郎

群馬県立自然史博物館学芸課：〒370-2345 群馬県富岡市上黒岩1674-1

Shuichiro NARASAKI

Department of Anthropology, Gunma Museum of Natural History: 1674-1, Kamikuroiwa, Tomioka, Gunma 370-2345, Japan

馬場悠男

国立科学博物館人類研究部：〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1

Hisao BABA

Department of Anthropology, National Science Museum, Tokyo: 3-23-1 Hyakunin-cho, Shinjuku, Tokyo 169-0073, Japan

松浦秀治・近藤恵

お茶の水女子大学生活科学部：〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Shuji MATSU'URA & Megumi KONDO

Faculty of Human Life & Environmental Science, Ochanomizu University: Otsuka 2-1-1, Bunkyo Ward, Tokyo, 112-8610, Japan